なつて新聞に出されたりすることを英吉は人並以上に恐れてゐた。

「ぢや、君は階下へ行つていゝよ」と、英吉は明に座を立たせて、入代つて靜夫を招いた。仙子とは昨今の知り合である靜夫からは、手頼りになる返事を豫期されなかつたが、若しも祕密の心當りはないかと、腹藏なき意見を求めた。

「參考のために僕だけの胸に收めて置くのだから、間違つても後で君に責任を負はせはしないよ」と相手に氣を兼ねながら訊くと、先きからこの事について殆んど何等の差出口も利かなかつた靜夫は、

「私におまかせになれば、私が責任を以て仙子さんの行方を搜出しませう」と、キッパリした返事をした。

「君がさう云つて呉れると僕も非常に安心する」と、英吉は俄に晴々した氣持になつて、「何か確かな心當りがあるのかい」

「さういふ譯でもありませんが、先生が私を信じておまかせ下されば、屹度お搜しします」

「君は僕等よりも世間の事に明るいから、何かいゝ分別があるのだらう。君を信じて一任するから骨を折つて呉れたまへ。若し費用が入るのならいくらでも出すよ」

「費用なんか一錢も入りませんが、成功した後で一つお願ひしたいことがありますから、その時は聞いて下さいまし。それから仙子さんが歸つて來られても何も仰有らないで、一切許して頂きたいんです」

「それは承知した。決して小言は云はないから、安心して歸つて來るやうに當人によく云つて呉れたまへ」

「先生がさう云つて下されば私も勵みがつきます」

靜夫は英吉の前を辭して階下へ下りて自分の部屋へ入つた。机に頰杖ついて目を瞑つて暫く考へてゐたが、安受合ひに受合つた搜索について、いゝ方法は容易に思ひつかなかつた。……「しかし、どうせ何等かの手段で仙子の方からおれにあてゝ知らせがあるに違ひない。無間なことをしないで、うまくおれだけに知れるやうな知らせ方をして呉れゝばいゝが。……それがおれの運定めだ」と、彼れは心元なく思つてゐた。

靜夫は暫く思ひ倦んだ揚句に度胸を据ゑて、英吉夫婦には搜索に出掛けるやうに見せかけて×軒へでも行つて珈琲でも飲んで來ようと思ひ立つて座を立つたが、するとふと、硯箱の側に新しい小形の聖書の置かれてあるのに目がついた。仙子の物らしいが何時の間に置かれたのかと怪

しみながら、急いで手に取つて見ると、その中から小く疊んだ薄い洋紙が辷り落ちた。

「明さんが怖いのです。叔母さんも怖いのです。今日の中にもどんな目にあふか知れないやうな氣がして家にぢつとしてはゐられませんから、今度こそ二度と家へは歸らない覺悟をしてこれから出て行きます。私には行き場所がありませんから、とにかく東京驛の停車場へ行つてあなたを待つて居ります。この紙を御覽になり次第すぐに停車場まで來て下さい。若しも來て下さらなければ、一人で汽車に乘つて何處かへ行つてしまはふと思ひます」

靜夫はペンで走り書きした文句を讀むとともに一安心したが、靜かに樂める戀を樂まうとしないで、わざわざ事を荒立てゝ自分を苦めてゐる女の所行を歎息して、絶えずこんな風であつたらと、小煩くも思ひ出した。

明の迂散くさい目を微笑で見返しながら、靜夫は家を出て道を急いだ。……若い女心が煩いには煩いが、自分を待つてゐる女に會ひに行くことの樂みは次第に彼れの胸に湧上つた。大晦日以來人目に妨げられてしみ〴〵話をする機會はなかつたのだから、初戀の間柄で牴牾しいのも無理はないと、女の所行を尤ものやうに思直したりした。

停車場へ入ると、靜夫は女を捜し出す前にいろ〳〵な男女の旅立ち姿を左右に見て頻りに旅行

慾をそゝられた。自分と同じくらゐな年齢の若い男が立派な身裝をして、若い婦人を連れてゐるのを見ると、役所勤めだけではいくら精勤しても贅澤の出來る見込みのない彼自身の境涯が淋しく顧みられた。

捜すまでもなく、仙子の方から彼れの方へ寄つて來たが今朝とは見違へるやうな青褪めた顏は數時間の彼女の心勞を無言の中にも語つてゐた。

靜夫は聖書に挾んだ置手紙に早く氣がつかなかつたために、長く待たせて濟まなかつたと言譯をしながら、肩を並べて停車場を出たが、家の中の騷ぎについては明らさまには云はなかつた。そして、歩きながらの話では自分も物足らないし、叔父の家へ歸らないといふ女の堅い決心を飜へさせることも出來さうではないので、大晦日の夜に一緒に行つた愛宕町の家へ一先づ出掛けることにした。

「飯倉へ歸らなくつてもよければ、私何處へでも行つてよ」と、首垂れてゐた仙子は、さも悅しさうに云つて顏を上げたが、その顏は俄に生々して來た。「貴下が無理にも私を引摺つて飯倉の家へ連れて入らつしやりやしないかと、何よりも心配してゐたのよ」

「そんなに彼家がいやになつたの？。」靜夫はさうまで居づらい思ひをしてゐる女の心根を思ふ

といた〳〵しくなつた。お互ひの利益や世間體などはどうでもいゝから、目下の女の心に殉じて、將來はどうにでもなれで、燃えかけた二人の戀を思ふさま樂しんだ方がいゝやうな氣持にフラフラとなつた。

「貴下にもお知らせすまいと思つてゐたのですけれど、明さんは隙さへあれば私に酷いことをしようと企んでゐるんですよ。……私事によつたら死ぬくらゐ何でもないと思つてゐるんですけど、明さんなぞに生命を取られたりしちや詰らないと思ふわ」

「あの人もまさかそんな無法なことはしないでせう」

「貴下は明さんを買かぶつてゐるのよ。貴下は思つたよりも人がいいのね」

「それは極つてゐるさ」靜夫は微笑して、「僕を惡人と思つてゐたんですか」

「さうぢやないわ」仙子は慌てゝ打消して、許しを乞ふやうな目付をして、「堪忍してね」

二人は愛宕下の家の一室で宵の間を過ごした。

仙子がどんな障礙でも押退けて男と一緒にくらさうとする强い覺悟は、靜夫を驚かせた。これまで係り合つた二三の女よりも、初心とばかり思つてゐたこの仙子の方に却て手剛いところのあるのを意外に思つた。

「貴下が叔父さんに云ひにくいと仰有るのなら、私から手紙で知らせることにしてもいゝわ。私、叔父さんや叔母さんの思惑なんぞ氣にするのは詰らないと思つてゐるんですから、貴下も執拗く仰有らないやうにして下さいね」

「だけど、叔父さんも私たちの氣儘をさせて打遣つときやしませんよ。相當の順序を經て願つたら、快く二人の戀を許してくれるでせうけれど」

「そんな掛引なんぞ私いやよ。……貴下がどうしても私を飯倉へ連れて歸らうとなさるのなら、私貴下の心を疑つてよ。本當に私を愛していらつしやるのなら、私を牢屋のやうなところへ押籠めて虐めるやうなことをしないでせうから。……叔父さんは勿體ないほど私を可愛がつてくれるんですけど、この二三日は針の筵の上に坐つてるやうな氣がしてゐたんですよ。思ひ切つて彼家を出てよかつたと、先つきからたび〳〵さう思つてるの。……だから、この上いやなことを云つて私を困らせないで、もつと面白い話しを聞かせて下さいね」

夢心地になつてゐる仙子も、靜夫が口を噤んで何か考へてゐるらしいのを見ると、ふと心淋しい手頼りない氣持がするので、絶えず話を聞いてゐたくつて、相手を促した。が、靜夫は差當つて飯倉の方の處置をつけなければならぬので、何時迄も女を喜ばせるやうな話ばかりはしてゐら

れなかつた。

「かうなつた上は　僕だつて一日も早く貴女と一緒に暮らしたいのだけど、今夜直に家を捜す譯には行かないし、貴女は一人で宿屋へでも泊れますか」

「泊れますとも。そのくらゐなこと何でもないわ」と、仙子は元氣よく云つたが、「だけど、出來ることなら、貴下も二三日は飯倉へ歸らないで、一緒に旅へ出るとか、東京の宿屋で暮らすとかして下さらないでせうか。……こんなことお賴みするのは私の我儘なのでせうか。我儘なら無理に云ふのは惡いから、今夜一晩は何處でゞも辛抱しますわ」

「旅行は僕も望んでゐるのだが、今直といふ譯には行かないな」靜夫は先つき停車場で見た光景を思ひ出して、女の言葉に危く動かされかけたが、强ひて早り立てた心を壓へて、「駈落ちをしちやお互ひに後で困ることが出來て來るだらうからね」

「駈落ちなんて惡い名をつけなくつてもいゝわ。貴下も旅行を望んでいらつしやるんなら、尙更私のためにさうして下さるといゝんだけど。……休暇が明けて貴下がお役所通ひをなさるやうになつたら、私何處へも出ないで、毎日家でお留守居してゐますから、今の間に、貴下のお休暇の間に、貴下に隨いて何處へでも遊びに連れてゝ頂きたいと思つてゐますの。せめて二三日でも

……ね」

仙子は無邪氣さうに云つたが、遊びを望むよりも、半日でも一夜でも靜夫に別れるのが心元なく思はれてゐたのであつた。仙子は繻珍の紙入を出して靜夫の前へ置いて、「故郷から持つて來たお金も、叔父さんに頂いたお金も皆なこの中へ入れて持つて來たのよ。こんな時にと思つて、欲しい物も買はないで儉約して溜めといたんですから、今皆な貴下にあげますわ。貴下の好きなやうにして使つて下さいな。これが無くなつたら私一文なしなの。でもいゝわ。溜めて置いたものが役に立ちさへすれば」と云つて、新たに興奮して目を潤ませて、「私もう何にも入らないわ。お金も何にも。……貴下が長い間私のことを思つてゐて下すつたんだから」

仙子はこの人一人が世界に生きてゐるやうに思ひながら靜夫の顏へ潤んだ目を向けた。

戀に潤んだ女の目を見てゐると、靜夫も初戀らしい純な氣持になつて、その女を得てゐさへすれば、他のすべてを棄てゝもいゝやうになつて、自分で壓へやうと努めながらも壓へられなかつた。心に浮んでゐた英吉夫婦や明の顏は次第に稀薄になつて、頰の肉の豐かな目の潤んだ仙子の顏のみが鮮かに彼れの心に宿つた。

「貴女が飯倉へ歸らないのに、僕一人で歸つたつて仕方がない。旨い言譯の道はありやしない」

と、靜夫は今まで多少の智慧も計略も持つてゐたつもりの靜夫自身をかなぐり棄てゝ、投出すやうに云つて、「かういふ運が向いて來たのだから、五十歩百歩の姑息な誤魔化しはしないで、今直ぐに先生に事情をお知らせして、僕も今夜から飯倉の玄關番を辭職しますよ。さうしたら貴女と一緒に旅行に出ようとも、東京で室借りして暮らさうとも、お互ひの勝手が出來るんだから、

「貴下本當にさういふ氣になつて下すつて。……あゝよかつた」と、仙子は震へるやうに息を吐いた。

「僕もこれでせい〳〵した。先生の思惑なんぞを愚圖々々考へてゐたゞけ僕の方が馬鹿だつたのさ。早くさう極めればよかつたのに」

靜夫は事が極ると、急いで階下から硯箱や卷紙を持つて來て、英吉宛ての手紙を書いた。

「叔父さんには濟まないのだから、後で私がくはしいお詫びの手紙を出しますと、書添へといて下さいな」と、仙子は一心に靜夫の筆の運びを見詰めながら云つた。

表書を書いてしまふと、靜夫は女を促して歸り仕度をして、手紙は外套のポケットへ入れた。そして、こんな家へは今後出入りする必要はないのだと、ひそかに思ひながら、女中だちには近日を約して裏木戸から戸外へ出た。

「何時の間にか曇つた。雪でも降るのかな」と、靜夫は珍らしく空を見上げて呟いた。寂とし寒い空氣は二人の顏に染みた。

兎に角停車場まで行つて汽車の都合で行先を極めるとにして道を急いだ。英吉への手紙は途中の郵便局へ寄つて速達で出すとにした。差出す前に、靜夫は中の文句を一應頭の中で讀み返した。

「……申上ぐるも恐縮の至りに候が、據ろなき事情にて先生の御恩に背き御心配を相掛け候やうに相成り候。何卒數日間の外泊をお許し下されたく候。仙子どのも御無事にて候故、その點は御安心下されたく候。いづれ數日後には尊顏に接し千萬御叱責を仰ぐべく……」

これでいゝと、手紙を速達掛りの手に渡すとゝもに、靜夫は過去の自分のすべてが消えてしまつたやうな氣がした。

新橋の停車場へ行つて見ると、横須賀行の發車間際であつた。小田原の明の泊つてゐた宿屋を落行先としてゐたのだが、仙子が嫌つてゐるし、汽車の都合も惡かつたので、咄嗟に鎌倉行の切符を買つた。

汽車が停車場を離れると、下らないことを思ひ煩ふ餘地は二人の心に無かつた。二人とも手ぶらでステッキ一本合財袋一つ持つてゐなかつた。

「先つき手紙を出す時に氣がついたのだが、貴女の聖書が何時の間にか僕のポケットへ入つてゐましたよ」と、靜夫はそれを取出して不思議さうに見入つた。

「他の書物よりも聖書の中へあの紙片を挿んだ方が、私の思ひがたしかに屆きさうな氣がしたのです。紙片を入れる時私一心に聖書を拜みましたの」と、仙子は黑革表紙の上へ感謝の目を向けた。……この聖書はあの時下女の手を經て竊に靜夫の机の上に置かれたのであつた。

十四

鎌倉へ着くと、一度一人で來たことのある光明寺のほとりの宿屋へ俥を馳せた。宿屋は滿員だつたので斷られたが、歎願して、家の者の寢室になつてゐる狹い部屋を明けて貰つて、やうやく二人の身體を安んずることが出來た。鹽湯へ入つて冷えた身體を溫めて來ると、部屋の中が片付けられて火鉢や茶器が出てゐて、狹いながらも居心地のよさゝうな客座敷になつてゐた。左右の分らない暗い途を通つてゐる間、流石に不安な思ひに嚇されてゐた仙子は、自分たちのために突如に明るい部屋が設けられてゐたのを喜んで不思議さうに左右を見廻した。

食事は既に濟んでゐるし、夜も可成り更けてゐるので、寢床が延べられたが、二人はこのまゝ

睡眠に就くのが惜くて、火鉢に手を翳しながら、汽車の中や湯殿で見聞したことなどを種にして、一しきり取留めのない話をしてゐた。

速達郵便によつて起された飯倉の家の騒ぎはをり〳〵靜夫の想像に浮んで來た。最早その騒ぎのために心を亂されはしなかつたが、明に對して長い間有つてゐた憎みも何時の間にか消えてゐた。女の方から明のことを惡樣に云ふのがむしろ聞苦しかつたので、

「あの人のことは東京へ歸るまでお互ひの口から出さないことにしませう」と話を遮つた。

「私だつて明さんのことは云ひたかないんですけど、あの人から無理無體にいろんなことを聞かされてゐるんですから、それについて腑に落ちるまで貴下に伺つときたいと思つてゐますの」と、仙子は第一におとよと靜夫との關係について、明に注込まれた恐ろしい疑念を拂ひたかつた。

「貴女の聞きたがつてるのは、僕の過去の所行なのかも知れないが、どうぞ過去のことはほじくらないやうにして下さい。僕は今度貴女に救はれたのだから、去年までのことは思出したくもないんですよ。それを今貴女に責められちや、僕の初戀も苦くなるから」

「貴下を責めるんぢやないの。……だけど、明さんの云つたことはあの人の揑造事か邪推だと、一言貴下の口から云つて貰ひたいんですの。それだけ聞かせて下されば、この先決して貴下に無

理を云はないつもりだけれど」

「しかし、僕は貴女に對して口先だけのいゝ加減な返事はしたくないんでね。一體何を聞きたいのだね。以前の僕のしたどの事で僕に懺悔をさゝうと云ふんです」

「ハッキリ云つて貴下に怒られると惡いから。屹度嘘なのでせうから」仙子は口から出かゝる言葉に自分で驚いて唇で壓へて、「貴下が飯倉へ越して入らしつたのは、先日私に仰有つた外の祕密は何もなかつたのね、叔父さんの家庭は貴下だつて尊んでゐなさるのだから」

「尊ぶ？」

この言葉は靜夫の耳には異樣に響いた。たまに教會に出入りしてゐるのも氣まぐれとばかりは云へないので、をり〳〵は心から神の存在を考へたり神の爲す奇蹟を考へたりすることもあるし、女人に對しても涙ぐまるゝほどに思ひを寄せたこともあつたが、世間の男や女を、世のさまざまな者を意識して尊んだためしはなかつた。

「貴下は叔父さんを先生として敬意を有つていらつしやるんでせう。先生を侮辱するやうなことを貴下は夢にも考へて入らつしやりはしなかつたのね」

「無論ですとも。侮辱した覺えはないが、明君がそんなことを云つたんですか」

「ぢや、それでいゝの。私安心してよ。」

仙子は晴々した顏して悅さうに云つた。何のことかと今度は靜夫の方が腑に落ちない思ひをしだしたが、强ひて訊返さうとはしなかつた。

廊下の足音も途絕えて、しめやかな雨の音が聞えだした。

靜夫は云ふまでもなく、仙子も何の惱みもないものゝやうに實に快よく眠つた。

翌日は寒い雨が降頻つたので、海邊へも出られず名所見物にも行かれなかつたが二人とも一室の蟄居に滿足してゐた。靜夫が九州地方の話をすれば、仙子は故鄕の話をした。歸京後家を一軒持つか、あゐひは、室借りをするかして、兎に角新家庭をつくることについては、仙子が熱心に望んでゐるばかりではなく、靜夫でさへも邪氣ない思ひを寄せてそれを望むやうになつた。……世界は廣いし女の數は多いのに自ら好んで小さな家庭の虜となつて、女房の機嫌氣づまを取つてゐる男の氣が知れないと嘲つてゐた彼れの心にも、今は樂い家庭の夢が浮んで來たのであつた。……で家を持つにはどの邊がいゝだらうなどゝ、まだ東京の地理をよく知らない仙子に向つて眞面目に相談をしたりした。

「貴下に都合のいゝ處でさへあれば、私どんな處に住んでも不平云はないことよ。だけど、飯

倉の近所にだけはゐたくないの」

「しかし、僕等の新家庭へ先生が遊びに來てくれるやうだつたらいゝがね。僕等が着實に暮らしてゐたら、先生だつて何時か許して下さるだらうと思ふけれど」と、靜夫の方が却つて弱々しいことを云つた。

「叔父さんは人がいゝから叔母さんに氣兼ねばかりしてゐて駄目よ」と云つて仙子は自分が見聞してゐた實例を面白さうに話しだした。

靜夫は微笑して聞きながら、先日電話を掛けそこなつた清樂軒の事を遠く思ひやつてゐた。「おれが附いてゐなければ、先生とお花との關係があれ以上には進まないだらう。しかし、進まない方が家庭に波瀾が起らなくつて、先生のために却つて幸福かも知れない」と思つて、英吉の出來心の成行について、さしたる興を感じなくなつてゐた。

聖書の他には讀み物一つ持つて來てゐないので、靜夫は話が途切れると、退屈醒ましに博多節など口ずさんだ。幸ひに降り頻る雨の音にまぎれて唄聲は外へ洩れなかつた。そして、微かに動いてゐる唇を見詰めながら耳を澄ましてゐる仙子よりも、唄つてゐる靜夫自身の方が一層多くその音調に感動してゐた。涙ぐまれる氣持がした。雨の音も身に染みた。障子を開けると、冬枯れ

の裏の丘には、ビショ濡れになつた小狗が地べたを嗅ぎながら淋しさうに歩いてゐた。

軈て火鉢の側へ戻ると仙子の目には一杯の涙が溜つてゐたので、

「何を考へてゐるの？」と、靜夫は急に氣を取直して快活な顏して訊ねた。

「貴下が何か考へていらつしやるから、私一人ぼつちになつてゐるやうで、つい將來の事が考へられて悲しくなりましたの」

「默つてゐるから必ず考へ事をしてゐると極つてやしないさ」

「……人間は何故將來のことが考へられるんでせう。現在を幸福に思つてゐるのなら、それでいゝのですのに」

「貴女が十分に僕を信じてゐないから、餘計な心配をする氣になるんですよ」

「さうぢやないわ」仙子は一ゐざり膝をすり寄せて、信じてゐると頻に誓つて、「惡かつたら堪忍してね」と、相手の顏を覗き込んで云つた。

この『勘忍してね』は、昨夕屢聞かされてゐるのであつたが、この甘へてゐるやうな、媚びゐるために技巧を用ひて云つてゐるやうな女の言葉が、靜夫の胸には何とも云へない懷かしみを傳へるのであつた。

靜夫はふと戯れるやうに、温かい女の手を自分の手の平へ乘せた。そして見てゐると、その手は意外に廣くつて指も太かつた。彼れは今はじめて見るやうに女の耳や鼻の形に目を留めた。

午後には雨が小降りになつたので、程近い海端まで出て見たが、風が寒いために長く眺めを貪つてはゐられなかつた。

靜夫は鹽湯に漬つた後で、夕餐時までぐつすり午睡をしたが、目が醒めると、

「私今吃驚したのよ」と、仙子はまだ不安な思ひの消え去らぬやうな顏して云つた。

「どうして？。僕が變な讒言でも云つたのかね」

「そんなことぢやないの。……私の見違ひでせうけれど」と、仙子は口へ出すのを躊躇して、今一度考へ直してゐたが、やがて、「先つき俥で新奇なお客が着いたやうだつたから、障子の隙間からそつと覗いて見たのよ。横顏と後姿だけが見えたのですが、それが明さんらしかつたの」

「石田が此處へ來る筈がない。……貴女の氣のせいだよ」と、靜夫は笑つて頭から否定しながらも、若しやといふ迷ひが出たので、「その客はどの部屋へ入つたやうです？」

「私直ぐに障子を締めたからよく分らないけれど、階子段を上つて行つたやうでしたよ。……でも、あの人が此家へ來る氣遣ひはないわね。似てることはよく似てゐたけれど」

「絶對に來ないとは限らないね。あんなに貴女を思つてゐるのだから、魂だけでも後を追つてゐるかも知れない」

「いやよ、氣味の悪いことを云つちや」と、仙子は身震ひして、「私が見違へたのよ」と云つて、瞥見した新客の影を一心に目の前に浮べて居たが、明でないと云ふ確信は起らなかつた。却てそれらしく思はれてならなかつたので、「明さんが以前この宿屋へ泊つたことがあるかないか、貴下は知つていらつしやらなくて」

「さうさね。……石田は鎌倉の古跡の研究に行つて來たと、何時か話して居たことがあつたから、その時に此家へ泊つたかも知れませんよ」

「ぢや、先つきの人は明さんよ」

仙子の顏色は變つた。明が二人の跟を追つて來たのではなくつても、先日小[illegible]へ行つたと同じやうに、今度も戀の惱みに堪へかねてフラ〳〵と東京を立つて、鎌倉へ來たかも知れないと、彼女は一圖に思ひ込んで、「見つかつたらどうしませう。貴下もこの座敷から外へ出ちやいけませんよ」

「それは石田が來てゐたら、成べく避けた方がいゝが、あの男に此處で會つたら、それこそ奇

蹟だ」

「貴下は氣樂さうに云つていらつしやるけれど、自棄になつて無法なことでもされたら、私たちは大勢の知らない人の中でも恥かしい思ひをしなければなりませんよ。……いつそお夕飯を食べたら直ぐに、東京へ歸るか、他の土地へ移るかしたらいゝと私思ふわ」

「石田を恐れて逃げやうといふのですか」と、靜夫は悠然と落着きはらつて生眞面目に、「貴方は僕とかうして仲よくしてるところを石田に見られたら、何を云はれても言譯の途のないやうな弱點を持つてるんですか。若しさうだつたら、豫め僕によく打明けといて貰はなければ困りますね」

「何故そんな酷いこと仰存るの。私明さんなんぞに言込められるやうな後目たいことをした覺えはありません」と、仙子は強く言放つて、「私根もないことを疑ぐられちや口惜しいわ」と、顏に手をあてゝ忍び音に泣きだした。

「些とも疑ぐつてやしないけれど、たゞ貴女が石田をあんまり恐れ過ぎるから」と云つて、靜夫は仙子の手をその顏から放して、心の融けたやうな彼れは笑顏を見せた。

「ぢや、私この宿屋で明さんに會つても關はないわ。私に疚しいところがあつて恐れたのぢやないんですもの」

仙子は最早動じないやうに自ら努めたが、廊下へ出るのは躊躇して、便所へも行きかねた。だが、靜夫は午過ぎから萠しかけてゐた退屈な思ひが紛らされたばかりか、仙子に對する新な戀の刺戟をさへ得ることが出來た。二階に明がゐるかも知れないといふ疑ひは、夜が更けるまでも絕えず二人の心を生々させた。

翌日は雨は霽れたが、寒さは一しほ加はつて、名所見物になど出掛ける氣にはなれなかつた。靜夫は明のことを念頭に置いて廊下をぶらついたり湯に入つたりしてゐたが、それに似通つた男にも出會はなかつたので、むしろ物足らぬ思ひをしだした。

「矢張人ちがひしたのだ」と云つて、絕えず氣遣つてゐた仙子を安心させたが、仙子は疑念の融けた後でも部屋の外へ出るのを憚つてゐた。

取留めのない話をしてゐる間に、短い冬の日は雜作なく暮れた。いやでも明日は東京へ歸らなければならぬと、靜夫は歸つた上で英吉夫婦に會つた時の自分の態度を考へてゐたが、何よりも先に一時二人の身を落着けるための貸室を見つける必要があつたので、ふと思ひついて、愛宕下の××軒へ訊合せることにした。

用事は兎に角、東京へ長距離電話を掛けることが、彼れに取つては退屈醒ましの興味になつた。
餘程經つてから、宿の者の知らせによつて、電話口に立つと、望み通りに一番懇意な女中の聲が幽かに聞取れた。
「オヤ、白井さんでしたの？　何方かと思つたら。貴下どうなすつたの？。何處に入つしやるの？」と、女中は疊みかけて訊ねた。
「鎌倉にゐるんだよ、鎌倉に」と、靜夫は事もなげに答へた。
「鎌倉ですつて？。……昨日ね。お友人の方が入しつて貴下のお噂をして、大變心配していらつしやいましたよ。……何時東京へお歸りなさるの。早く歸つて入つしやいな」
「明日は歸るよ。……だけど、僕から電話が掛つたことは誰れにも云はないやうに賴むよ。いいかい。そのかはりお土產をドッサリ持つて行くよ。……今時分其方は忙しいだらうから、これで電話を切らうね」
靜夫は最早貸室の話などする氣にはなれなくなつて、先方がまだ熱心に話しかけるのを構はず、俄に電話室を離れた。明が××軒へ出掛けて自分だちのことを喋舌つたと知ると、何とも云へぬ不快を覺えたが、それとゝもに、油斷してはゐられない氣がした。部屋へ戻ると、

「貸室はありさうですか」と仙子は待ちかねてゐたやうに訊いた。
「それどころぢやない」と、靜夫は女中から聞いたことに少しおまけをつけて話した。
「煩いのね。餘計なことを觸れて廻る人だわ」と、仙子は眉を顰めた。
「電話から足がついて此處まで追手に來られちや溜らない。明日は早々引上げるんだね」と、靜夫は自分の藪蛇の所行を悔いた。普通の驅落者あつかひされて、山村家から追手を向けられるのはさして恐れはしないが、それも戀の餘興だとして諦らめられもしようが、人の出入の多い宿屋で騷ぎを起されて、若しも新聞に出されでもしたら、官吏といふ自分の身分の上に一方ならぬ打擊になるのが恐ろしかつた。
その夜仙子は、玄關の方に新たに客の來たらしい氣色がするたびに驚いた。「もし迎への人が來て、私一人を引張つて行かうとしたら、私海へでも身を投げてしまふわ。死ぬる覺悟さへしてゐればいゝんだから、貴下も確りしてゐて下さいね」と、決心を顏に現して云つたりした。
「宿代を先に預けてあるからいゝやうなものゝ、番頭でも女中でも僕等を怪しんでゐるね。電話を掛けた時にも、女中同志で廊下の隅に立つて、時々胡散くさい目付で僕の方を見ちやヒソ〳〵話をしてゐた。浮かりすると心中でもしに來たかと思つてるのかも知れないね。何しろ聖書一つ

持つたゞけで、空手で來たんだから、變に思はれても仕方がないが……」

「ぢや、早く東京へ歸りませう。……私御馳走なんかどうでもいゝから、氣兼のないところで暮らしたいと思つてよ」

旅へ出たら煩いことは無くなると思つてゐたのにと、仙子は世の煩さを歎じた。

十五

仙子が家出をした日に、飯倉の山村家では、夫婦と明との三人がそれ〴〵の物思ひに沈みながら、淋しい晩餐を濟まして、靜夫が善惡いづれかの消息をもつて歸つて來るのを待ちあぐんでゐた。出掛けに堅く受合つた靜夫の言葉を信じてゐる英吉は、氣を減入らせて動もすると今にも泣出しさうな顏してゐるおとよを慰めて、わざと元氣のいゝ口を利いたりなどしてゐたが、やがてそこへ投込まれた速達の手紙を披いて讀むとゝもに、中の意味を自分の口からおとよなどに傳へ得られないほどに萎れてしまつた。

「誰れが惡いのでもない、おれが惡かつたのだ」と云つて、手紙は前において、二人の讀むにまかせた。

「白井の所爲といふことは僕にははじめから分つてゐたのです。かうならん前に彼奴を警戒しなければいけないと思つたから、叔父さんにもたび〴〵注意して置いたのぢやありませんか」

明はつゞいて叔母を罵り叔父にも突掛つた後で、何處かに顏を並べてゐる仙子と靜夫との影を心の中で追搜してゐたが、やがて、失望と憤慨とのために頭が混亂して居ても立つてもゐられないやうな氣がしたりして、フラ〴〵と暇を告げて外へ出た。

英吉は引留めもせず、何の言葉をも掛けないで、明が慌たゞしく出て行くのを見やつていたいたしく思つた。そして明が目の前にゐなくなつたゝめに、いくらか心の惱みが輕くなつたやうであつた。

「かうなつたものは仕方がないから、おれ達が諦めて二人を正式に結婚させるやうに道をつけてもいゝが、たゞさうしちや明に對して義理が立たんので困るよ」と、英吉は溜息吐いて、「全體お仙は明よりも靜夫の方を思つてゐたのかい。それとも、靜夫の方が性質が惡い誘惑を試みたゝめにこんなことになつたので、お仙の方では深い考へもなしに相手に引かれて行つたのだらうか。お前はこれまでのあの女の素振りでも何か思ひ當ることがあるだらう」と、おとよに向つて訊いた。

速達の手紙を讀んでからは、明の荒い言葉などは耳にも留めずに、暗い顏して一人で考へ込んでゐたおとよは、夫の問ひに突つかれてふと顏を持上げて嶮しい目をして、

「あの女は貴下の思つていらつしやるほど初心ぢや御座いませんよ。恐ろしい量見を有つてるに違ひないのです。初めから私達を馬鹿にしてかゝつてるんですから」と、憎さげに云つた。

「さう一概に惡く云つちやいけないよ」と、英吉は妻の尖つた言葉を苦々しく思つたが、今のやうな場合爭つてはゐられないので、

「兎に角二三日中には靜夫に會へるだらうから、その時に事情をよく聞糺して、適當な處置をつけることにしよう」と、相談相手には、ならない妻に關はずに、自分一人で心元なく極めた。

そして、二階へ上つて机に向つて、讀みかけの書物を披いたが、二三箇月以來の自分の希望や慰藉の滅茶〳〵になつたことが、机の周圍を見るにつけ、あるひは茶の間にゐるおとよの樣子を思ひ浮べるにつけ、ひし〳〵と胸に迫つた。神の奇蹟を願つたこともあつたが、自分の上に落ちて來た奇蹟には幸福の破片をも含んでゐなかつた。あれほど二人して望みを掛けて招き寄せた仙子も、災禍の種をこの家に播きに來て呉れたものゝやうに思はれだしたが、しかし、英吉は仙子や靜夫の若い同士が、自分だちを踏付けにしたやうなことをしたのを心から怒る氣にはなれなかつ

た。……避けがたい惡運の所業として首を垂れて手を束ねて歎息してゐるより外に仕方がなかつた。

おとよも茶の間で首を垂れて歎息してゐたが、仙子に對する憎惡の念を和らげることは出來なかつた。彼女を甥の明の嫁にし得なかつたのは些とも遺憾には思はないが、靜夫と、そんないゝ戀仲にならせたのは、思つても胸の張裂けるほどに無念であつた。

「でも、靜夫が隨いてゐるから、お仙の生命に別條のないだけは安心だ」と、英吉は氣休めを云つて、その夜も平生通りに眠つたが、おとよは殆ど眠つかれなかつた。そして、夫がこんな大事件をも事もなげに見做してゐるらしいのが腹立たしくて、屢耳許で聲を掛けて無理無體に呼醒ました。

「おれは決して平氣でゐるんぢやない。善後策をよく考へてゐるんだ」と、英吉は頻りに言譯をしてゐたが、おとよには善後策といふ言葉がすでに氣に入らなかつた。あの二人の戀を許して添遂げさせようとする意味の善後策なら、些とも望ましくはなかつた。

「出來たことは仕方がないで、二人の氣儘にさせといちや、明の立つ瀬がないぢやありませんか。今までお仙ちやんに騙されて來たやうなものですからね」

「明はお前の甥だから、お前が今度の事を憤慨するのも無理はないがね。しかし、既にかうなつた上は、お仙を明の嫁にする譯には行かないんだから、あの女と靜夫との仲を裂いたつて、誰れの爲にもなりやしない。却て二重に不幸を招くやうなものだ。だから今度の處置はおれに任せといて呉れ。その代りにお前や明にはおれが謝まるよ。元々おれの不注意から起つたことだから、おれが皆なの前に兩手を突いて謝まるよ」

「貴下に謝つて頂いたつて何の足しにもなりやしません。そんなことで明の面目が立つ譯ぢやありませんから」

「それはさうだが、今ヤキモキしてゐたつてどうすることも出來ないんだから、兎に角二人の居所が知れて、當人達に會つて、その心持を聞いてからのことにするんだね」

英吉は詰掛けて來る妻の苛立つた言葉を穩かにあしらつては、とろ〳〵と眠りに落ちた。が、明け方になつてやうやく目を閉ぢた妻の不安な寢顏を、隙間洩る朝の光で見てゐると、一層味氣ない氣持がした。折角呼寄せて、陰鬱な家庭の光ともしてゐた仙子を靜夫に奪はれた上は、また以前のやうな夫婦差向ひの淋しい生活を果しなく過さなければならないのが堪へがたく思はれだした。

夫婦がまだ寢床を離れない前に、明は疲れた目をして入つて來て、茶の間の火鉢に寄掛つて、自暴に煙草を吸つてゐた。そして、夫婦が起きて行つても、無愛想な顏して口も碌に利かなかつた。

「馬鹿に早いぢやないか。昨夕下宿へ歸つて今朝出て來たのかい」と、英吉が訊くと、

「え丶。……」と、明は曖昧に答へた。

「今日明日の間には居所が分るだらう。君も氣掛りであらうが」

「なに、僕はもう氣に掛けてやしません。」

明は未練な男として叔父に見られるが厭だつたので、かの事件については自分の方からは話を仕掛けなかつた。そして、夫婦が朝餐の膳に向つてゐる間に、書生部屋へ入つて、靜夫の夜着を出して頭から被つて横になつたが、すると、前夜の自棄遊びの疲れが出て來たので何時の間にか前後不覺に眠入つた。

捜索の手掛りがないので、終日當てのない音信を待ちながら、三人三樣の苦い思ひに沈んで暮した。皆なが心を一つにして、家出した者の身の上を案じるやうにはならなくつて、三人の話は絶えずチグハグになつた。雨さへ降頻つて、家の中はます〳〵鬱陶しかつた。が、それにも關は

らず、明は些つと散歩に出るか珈琲でも飲みに行くかしたかと思ふと、間もなくこの鬱陶しい家へ戻つて來た。おとよも夫の意見に甚だしい不滿を感じながら、獨座に堪へかねてその側を離れなかつた。

英吉は行方を晦ましてゐる二人の影に惱まされてゐる上に、目の前に頑なに腰を据ゑてゐる二人の言葉やあるひは無言の表情によつて苛まれてゐなければならなかつた。そして、責苦に會つて萎けた彼れの頭の中では、清樂軒のお花の姿などは、しばらく影を潛めてしまつた。

靜夫は仙子を芝口の宿屋へ置いて、自分一人で飯倉へ向つた。かういふ場合には、世馴れた知人に賴んで話をつけて貰ふのが普通なのだが、靜夫はそんな廻りくどい方法は取らないで、直かに英吉に會つて善惡どちらでも早く極りをつけようとした。

飯倉の家の閾を跨ぐ時には、流石に彼れも氣おくれがした。そつと格子戸を開けて、面痒い顏して玄關へ入つたが、彼れを見つけたおとよは、「靜夫さん……」と震へ聲で呼掛けて側へ寄つて來た。

「先生は二階にいらつしやるんですか」と云つて、靜夫が先づ英吉のところへ行かうとするのを、おとよは遮つて、强ひて書生部屋へ連れて行つて、

「先生より先に私が聞きたいことがありますから、そこへお坐んなさい」と靜夫を自分の前に引寄せたが、目には涙が宿つてゐた。

「今まで何處にゐたんです?。お仙ちやんは今何處にゐます?。一切の事を隱さずに私に云つておしまひなさい、事によつたら私から先生にお詫びして上げますが、その前に私にだけはじめから今までの事を隱立てなく打明けておしまひなさい。それが貴下の義務です」

「申譯のないことをいたしました」と、靜夫は手を膝に置いて首を垂れて、つとめて恐縮した態を裝つて、「しかし、先生や叔母さんが寬大なお心でこの度の私だちの事をお許し下されば、お仙ちやんの生涯を幸福にするやうに私の全力をつくします。どんなことがあらうとも、お仙ちやんを不幸な目に會はせはしません。今度こそ私の一生のお願ひですから、お二方に聞いて戴きたいと思つて、恥を忍んでお伺ひしたのですが……」

「貴方はそれほどにあの女の事を思つていらつしやるの」と、おとよは息をはずませて、「つい先日までおきくさんに付纏はれて迷惑するから、あの女を避けるためにこの家へ引越したいなんて云つてなすつたくせに、此處へ來て日數も經たない間に、もうお仙ちやんに目をつけたんですか。貴下は恐ろしい人ね。貴下の移り氣からあの女から此の女と次へ〳〵と墮落させて、それで罪惡

とは思つてゐらつしやらないんですか」

「これまでに私のしたことについては言譯はいたしませんが、お仙ちやんに對しては私の一命を捧げてゐるのです。これだけは私の申上げることを信用して下さい」

「……さうですか。貴下御自身の口からこの女のためには生命までも捧げると仰有るのを私は今度はじめて聞きましたよ。……これほどに思つてゐるのを妨げるのは邪慳だと貴下は思ひなさるか知れないがお仙ちやんを貴下のお嫁さんにすることばかりは私どもゝ承知出來ません」

「ぢや、私にお仙ちやんの夫となる價値がないと仰有るんですか」

「いゝえ、さうぢやありません。……第一あの女のやうな氣の利かない女は、貴下のお嫁さんとして不適當なんですから」おとよは平生自分の傍に置いてゐた女に靜夫が生命かけて戀してゐると知ると、ことに妬ましさに堪へられなくつて、思ふさま折檻したくなつて、「お仙ちやんは何處にゐます？。……貴下が連れにいらつしやらなくつても、此方から俥で迎へにやればいゝんですから、……隱さないで居所を敎へて下さい」

「それは早晩申上げます。お仙ちやんは此家の身内の方ですから、無論住所をお知らせしなければなりません」

靜夫は今明らさまに知らせてなるものかと、ひそかに冷笑しながら、「かうなつた上はお宅に置いて頂く譯にはまゐりますまいから、今からお暇して外へ引越すことにいたしませう」と云つて、つと立つて押入れを開けて夜具などを出して荷造りに取掛つた。

「折角賑かになつたと思つてゐたら、貴下ももう家を出て行きなさるんですかねえ」

おとよは先きの妬みも忘れて、たゞ心細さに力なく涙をホロ〳〵と落した。

「貴下々々」と、階子段の下から慌たゞしく呼立てるおとよの聲に驚いて、英吉は二階から下りて行つたが、靜夫の姿が見えると、何より先きにまづ安心の微笑を浮べた。

靜夫は荷物の側を離れて、英吉の前に兩手を突いたが、おとよとの應對によつて稍心の强くなつてゐるので、詫びを述べるにも惡びれはしなかつた。

「兎に角一刻も早くお仙に會はなければ安心が出來ないから、僕がこれから君に隨いて行かう」

英吉は無事に仙子を連れて歸る責任を感ずるとともに、おとよに邪魔をされない所で、穩かに靜夫と話を極めたかつたのであつた。靜夫は否む譯には行かないので、片付けかけた荷物を抛散らかしたまゝ、英吉に隨いて出て行つた。そして、途々問ひに應じて、眞實空言取りまぜて、家出後の經過を語つてゐたが、

「お仙さんは叔父さんに濟まない〳〵と云つて、心配のために神經が昂ぶつてゐますから、先生が今突然に入つしやつたら、非常に吃驚して困ることになりやしないかと思はれますが」と、やがて氣遣はしさうに云つた。

「成ほどさうだらうな。無論僕は頭から叱りつけたりなんかしないつもりだけれど、當人が僕を恐れてゐるやうなら、君だけ先へ入つて得心の行くやうによく言聞かせて呉れたまへ。その間僕は外で待つてることにしよう」

「早急に譯が分つて安心して呉れゝばよろしいが」と、靜夫は望みがなささうに云つて、「何にせよ、先生も戸外でお待たせして置いちや、私も氣が差してなりませんから、どうでせう。これから清樂軒へ行つて頂いて、私は後からお仙さんと一緒にお訪ねすることにしちやいけませんでせうか。幸ひ私どもの今の居所は清樂軒のつい近所なんですから」

「それはさうしてもいゝが、成べくなら、君たちの隱れ家へ自分で行つて見たいと思つてるから、都合のつき次第君の方から使ひでも寄越すやうにして呉れたまへ」

英吉は清樂軒で待合せるのに異論はないが、自分の遊び場所を仙子に見られるのを好まなかつた。靜夫は承知して途中で別れて芝口の宿屋へ引返した。

一人で待つてゐた仙子は案外悄げてもゐなくつて、「貴下がどんな約束をして入しつても、私飯倉の家へは歸りませんよ」と、靜夫が何も云はない前に、顏付で察したやうに云つた。

「僕も輕卒な約束はしないさ」と、靜夫は得意げに云つて、「どうせ二人が元通りに彼家に居る譯には行かないんだから」

「そして、貴下はどう話をつけて來なすつたの？　皆な心配してゐたでせうね」

「此方で思つてたほど心配もしてゐないね。怒つてることは怒つてるけれど」

「へえ、心配してゐないの？。私なぞどうなつてもいゝと思つてるんでせうか」仙子は意外に感じるとともに、却て多少の不平を覺えた。

靜夫は英吉が仙子を迎へに來てゐることを話して、「貴女が叔父さんに會ひたくないのなら、會はなくつてもいゝんです。僕はいやなものを無理に勸めやしませんよ……叔父さんは二人の仲を裂いて、貴女だけを連れて歸らうと思つてゐるんだから」

「私、もう叔父さんの云ふ通りになりやしないわ。鎌倉を出る時からちやんと覺悟してゐるのだから大丈夫よ」

「貴女がどうしても叔父さんに會はないつもりなら、それでいゝから、叔父さんに對する返事

は一切僕にまかせて下さい」

靜夫はゆつくり午餐でも食べてから英吉を訪ねることにした。一日も早く貸室捜しをして、二人水入らずの新しい家庭をつくることを話し合つて、夢のやうな樂しみに耽りながらも、英吉夫婦を自分の力で左右する方法を傍ら考へないではゐられなかつた。

十六

靜夫が一人で清樂軒の二階へ上つて行つた時には、英吉は待ちあぐんだ果てに、欺かれたのぢやないかといふ疑念に襲はれだして、お花の懐つこい浮世話に受答へする餘裕もない位になつてゐた。

「君が來たのか。……一人で」と、英吉はふと椅子から腰を浮かせて迎へた。

「大變お待たせしました」と、靜夫は冴えぬ顏して傍へ寄つて來て、お花の挨拶に卒氣なく應へて、椅子に腰を下した。

英吉はお花を遠ざけてから、聲を潜めて、「當人は得心が行つたのかい。お仙は不斷の僕を知つてる筈だから、僕に會ふのを怖がることはないと思ふが」

「怖がつても怖がらなくつても、先生にお目に掛らないで濟む譯ぢや御座いませんから、思ひ切つて私どもの宿へ先生を御案内しようと思つてまゐりました」と、靜夫は顏には不安な色を浮べながらキッパリした返事をした。

「なに會ひさへすれば大丈夫だよ。僕があれに向つてひどい事を云ふ氣遣ひはないから」と、英吉は直にも座を立たうとしたが、靜夫は椅子から身を動かさないで、

「私は先生の御恩に背くやうなことをしてゐながら、臆面もなくお宅へ伺つたりしたのは、よくよく決心をしたゝめなのですから、そこはよくお考へ置きを願つておかなければなりません」と重々しく云つた。

「いや、君が何時までも逃隱れをしてゐないで、自分で詫びに來たのは、まだしも君に男らしい良心があるのだと思つて、僕は喜んでゐるのだ。……しかし、そんな話は後廻しにして、一刻も早く君の宿へ行かうぢやないか」

「今度のことは私も一時の出來心ぢや御座いませんから、その點はよくお考へ置きを願ひたいのです。……先生はお笑ひになるか知れませんが、我々は思ひ思はれてゐる上は、生命を棄てるくらゐは何でもないのです。私は元よりお仙ちやんもその覺悟をしてゐますのですから、そこを

よくお含み置きの上で、お仙ちやんに會つて下さるやうにお願ひしたいのですが」

「それは僕には僕相應の考へがあるさ。君だちが案じてるやうな無慈悲な捌きはつけないよ」

「先生の寛大なお心は疑ひませんが、明君は云ふまでもなく、叔母さんだつて、私どもを憎んでいらつしやるに相違ありませんから、どうせこのまゝでは二人の思ひが遂げられようとは望んでゐませんのです。……實は先つき銀座で先生にお別れしてから今まで、二人して身の處置を話合つてゐたのですが、叔父さんが宿へ入つしやるのなら、その前に身を隠すと云つて、お仙ちやんはどうしても承知しません。ぢや、決してお連れ申さないからと言賺かせて、やうやく宿を出てまゐりましたが、今突然に先生のお姿を見たら、吃驚してどんな狂人じみた眞似をするかも知れないんです。私の破約を恨みもしませうから、一層仕末が悪いだらうと思はれます。……しかし、それも當人の我儘で、先生が會ひに入らつしやるのを、私がお留め申す道理はないのですから、致し方が御座いません」

「ぢや、どうしたらいゝと云ふんだね。僕も此まゝ手ぶらで家へ歸る譯には行かないぢやないか」

英吉は仙子の兩親に對する責任を新に感じて、當座の處置に迷つた。そして、

「あんな歳の若い女一人を、思ふやうに仕付けられなかつたのは、僕に人徳のなかつた證據だよ。僕のやうな者が人の子を教へるのは僭越だから、早速辭表を出すことにしようよ。今度のことも畢竟僕が種を播いたやうなものだ。」と、傍目にも痛々しい顏付をして歎息して、「僕が連れに行つたゝめに取返しのつかんことが出來ても困るから、一先づ家へ歸つてゐることにしよう。しかし、君から僕の意志をお仙に傳へて、今夜にでも會へるやうにしてくれたまへ。それだけは堅く賴んで置くよ」

「承知いたしました。……先生にはまことに申譯が御座いません」

「僕だち夫婦には幸福な日は來ないよ」

英吉はかう云つて、ふと遠くから此方を顧みたお花の目を避けた。

二人は速立つて清樂軒を出たが、英吉は目的を遂げないで素手で歸るのが、細君の手前腑甲斐なく思はれたので、「ぢや、君だちの隱れ家を外からでも見て行くことにしようよ」と云つて、自らさう極めた。

靜夫は當惑したが、それまでも拒む譯には行かないので、一緒に芝口まで來て、少し離れたところに立留つて、宿屋を指差しゝて教へて別れを告げた。英吉は素直に電車道まで後戻りしたが、

蟲が知らせるといふのか、何となく不安心な氣がしてならなかつたので、宿屋の方へ引返した。そして、怪訝な顔してゐる番頭に向つて、ひそかに二人の擧動を訊ねた後で、靜夫に宛てた名刺を屆けさせた。

今日一日だけでも叔父の手を免れたことに安心して、いろ〳〵な邪魔の起らない前に、早く落着ける住居を定めようと、一圖に靜夫をせびつてゐた仙子は、英吉の名刺を見ると、顏の色を變へて驚いたが、靜夫が氣遣ふほどもなく、

「どうせ仕方がないのだから、私覺悟して叔父さんに會ふわ」と、やがて穩かに云つて、「だけど、私が叔父さんとお話してゐる間貴下は少しの間此處を避けるやうにして下さいね。……大丈夫貴下のためにならないことは云やしませんから」

「なに、僕のためにならんことでも云つたつて構ひませんよ。ただ貴女が叔父さんの憎みを買ふやうな口は利かんやうに注意するんですね」

靜夫は多少の不安を感じながらも、打合はせをする暇もなく、女の乞ひにまかせて、空いてゐる隣室へ身を避けた。が、階子段を上つて來る英吉の足音が聞えだすと、われ知らず全心を耳に集めるやうになつた。

女中に案内された英吉は、胸を轟かせながらつとめて穩かな顏して障子を開けたが、一人で火鉢の側に坐つてゐる仙子の顏に臆した樣の見えないのが意外であつた。こんな風であつたのなら餘計な遠慮をするには及ばなかつたと、押して訪ねて來たのを喜びながら、火鉢の側へ寄つて、

「お前一人なのか」と訊いた。酒の香がまだ微かに彼れの息に殘つてゐた。

「えゝ。叔父さんのお叱りを受ける時には、私一人の方がいゝと思ひましたから」と、仙子は靜夫を遠ざけたことを告げた。

「それはよく氣がついた。無論白井の前でお前を叱つたりなんぞしないがね」英吉は仙子に對して平生にもまして親しみを覺へて、自分の方から先に目を潤ませて、「今となつて詮議立てしたつて何にもならないが、お前も無分別なことをしたものだ。かうなる前におれにだけ祕密で打明けて呉れゝば、正當な道を踏んでお前だちの望みを遂げさせてやることも出來たのに」

「……」仙子は首垂れて、言葉よりも樣子で詫びたが、豫じめ打明ければよかつたと後悔するほどには、叔父の力を信じてはゐなかつたので、目には涙も出なかつた。

「しかし、何にしてもお前は一先づおれの家へ歸らなければなるまいね。おれ達がよく考へて曲りなりにでも道をつけなければ、お前達のためにもよくないんだ。……それはお前にもよく分

つてるだらう。叔母さんも非常に心配してゐるんだから、兎に角これから直ぐに歸らうぢやないか」

「えゝ。……」

「おれが隨いてゐるんだから、決して悪いやうにはしないよ。……おれと一緒に歸ゐるだらうね」

英吉は相手の素直らしいのに安んじて、先日から重苦しかつた頭の中が俄かに輕くなつたやうな氣持がした。そして、直ぐにも座を立たうとして、戀し合つた若い二人の隱れ家としてはあまりに殺風景な粗末な部屋の中を見廻した。

「私どんなことしてゞもお詫びしますから、飯倉へ歸ることだけは勘忍して頂きたいんですの」と、仙子はふと、キッパリした聲で言放つた。

英吉は自立の耳を疑ふやうに、「家へは歸らないんだつて」と、訊返して、仙子の顏を見詰めた。

「叔父さんには濟みませんけれど、歸らないことに決心してゐるのですから。故郷のお父さんには私から手紙を出して譯を云つて、叔父さんに御迷惑を掛けないやうにいたしますわ」と、仙子は動じなかつた。

「飯倉へ歸らないと云ふのは、叔母さんが怖いためなのか」

「いゝえ、さうでもありませんけれど、……今日はなんにも聞いて下さらないやうにお願ひしますわ」

執拗な仙子の言葉に英吉でも激しかけたが、手荒い手段で引立てゝ行く氣にはなれなかつたので、「ぢや、それでいゝで打遣つとけるかどうかおれの身になつて考へて御覽」

「もうかうなつたんですから、叔父さんのお家にゐてもゐなくつても、同じことだらうと思ひますの。叔父さんも私の脫殼だけ連れてお歸んなすつても、何にもならないぢやありませんか。そのかはり、私たちがどんな境遇に落ちても、この先逃隱れをしないで、ちやんと居所をお知らせしますわ。そして、叔父さんが訪ねて來て下されば何時でもお目に掛つて、御意見を聞かせて頂きます」

「……お前をそんな度胸の据わつた女とは思はなかつた。……今までの仙子とは人が違つてるやうだ」と、英吉は呆れたやうに云つて、「お前がそれほどの決心をしてゐるのなら、おれの力ではどうすることも出來ないね。叔父さんは一人の子に死なれてお前を實の子のやうに思つてゐたが、今になつて見ると、おれが愚かだつたのだ」

「でも、私叔父さんのことを忘れてやしませんわ」仙子はふと懷つこい目をして、無邪氣らし

く云つて、「飯倉へ歸ることだけ堪忍して下されば他の事なら決して叔父さんに逆らやしませんよ。可愛がつて貰つた人を粗末に思ふやうな、そんな恩知らずの女ぢやないんですもの。靜夫さんだつて叔父さんの御恩を忘れてやしませんわ」

「おれはお前たちに恩を賣るために世話をしたのぢやないよ。……お前や明なんかの無邪氣な顏を見たり元氣のいゝ話を聞いたりするのを樂みにしてゐたのだが、お前がおれの側にゐたくないと云ふのなら、おれの一生の樂みもなくなつたやうなものだ。今後お前以外の女の子を家へ入れる氣にはなれないし、家の財產を誰れに讓りたいと思ふ當てもなくなつたのだよ。……お前は世間體もかまはず、兩親の考へも聞かないで、一圖に靜夫と一緒に暮らしたいと決心してゐるんだから、おれの責任として、成べく穩かな收まりをつけてやりもしようが、靜夫はおれの手からお前を奪つたのだ。……奪はれたおれの心をお前も察して見ろ」

英吉は仙子の察し得ない新たな嫉妬を覺えてゐるのであつた。

「靜夫さんは無理に奪つたのぢやありません。誘惑したのでもありません」と、仙子は言葉に力を入れた。「私があの人を信じて心を捧げたのですから、私が誘惑されたなんて思はないやうにして下さい。故鄕のお父さんにもさう云つてやります。決して誘惑されたんぢやないんですもの」

「しかし、靜夫とは昨今の知合ひで、氣心がよく分つてる譯はないと思ふがね。それはあの男は男振りもいゝし、口先も旨いが、あれの性質は、いくらお前が利口だつても、さう早く分る筈はないよ。靜夫はお前の思つてるやうな單純な男ぢやないぜ」

「叔父さんは何故明さんと同じやうなことを仰有るの。私のことならどんなに叱られてもいゝんですけど、靜夫さんにまで難癖をつけられたくはありませんの」

「おれは靜夫を庇つて來たのぢやないか」

英吉は却て仙子に押れて、その話は進められなかつた。そして、仙子の口から靜夫に對する强い戀心の洩らされるたびに、異樣な淋しさが彼の心に感ぜられた。

手剛い仙子を持餘した英吉は、靜夫を呼んで後の事を託して、一先づ此處を引上げるより外はなかつた。

宿屋を出ると、善後策を案ずるよりも、若い二人の周圍を顧慮しない戀仲を羨んでは、老朽ちた自分を憐みながら、しよんぼりして家路へ向つたが、自分の家の閾を跨ぐにも、何となく足が竦むやうであつた。

「貴下お一人？」とおとよは訊ねて、それと知ると、今まで張詰めてゐた心の遣場がなくて、

夫に向つて餘憤を洩らした。

「だからあの女は年齢に似合はず圖々しいつて私が云つたのぢやありませんか。それに貴下が先方の言ひなり次第になつて、指を喰へて歸つて來るつてことがあるものですか。居所が分つてゐるのなら、これから私が行つて連れて來ますから、この事の仕末は一切私に任せて下さい。貴下のやうにしてゐちやあの女のためにもなりやしませんよ」

おとよは夫に留められるほど、ますゝいきり立つたが、仙子を攫へて來るために家を驅出すことは出來なかつた。何時となしに根が疲れて、夕餐の仕度もしないで自分の寢室へ引込んで、暗いところで横になつた。先つきまで獨りで興奮して喋舌つてゐたくせに、樣子を氣遣つて慰めに來た夫に對しては最早口を利かなくなつた。何を云はれても一言の返事をさへしなかつた。

英吉は詮方なさに、獨りで不味い食事をして、書齋へ入つて、仙子の父親へ宛てゝ手紙を書かうとして筆を採つたが、どうしていゝか、こんな場合に相應しい處置が思ひつかないのだから、何時まで經つても筆は動かなかつた。そして宿屋にゐる二人の愛し合つてゐる樣や、階下に寢てゐるおとよの物狂はしい樣がごちやゝゝと頭に浮んで、彼れをして焦燥な思ひをさせた。

いつそこの筆で遺書を書て、家出をして、日向の孤兒院にゐる舊友をでも訪ねて行かうと考へて、自分の好みに合ふやうにしつらへた書齋にゐるのも苦しいやうに思はれだしたが、ふと後に何物かゝ近寄つた氣色がしたので、振向くと、何時の間にかおとよが其處に立つてゐた。青褪めた、何かに取憑かれたやうな顏をしてゐた。

「足音もさせないで突然で吃驚したよ。どうしたのだ?」と云ふと、おとよは火鉢の側へぐつたり坐つて、

「貴下は平氣でいらつしやるけれど、私はかうして生きちやゐられませんよ。貴下はお仙ちやんなんかを呼寄せて私を苦めなさるのです」と、怨めしさうに云つた。

「分らないにも程があるよ。ぢや、どうするのだい」

「私、市太のところへ行かうと思つてるのです。先つき寢てゐると、あれが私を呼んでゐますから」

「そんな下らないことを云はないで、氣を鎭めて寢て居れゝゝ。……お仙だつて今に歸つて來るだらうから、お前のやうに案じることはないよ」

「私、今になつちやもうあの女に會ひたかありません。會へばまた苦ませられるんですもの。……貴下だつて私を棄てゝ何處へか行かうと思つていらつしやるんだし、この先生きてゐれば、

私誰れにもかまはれないで、一人ぼつちにされるに極つてるのですから、今の間に市太のところへ行つた方が結句私の幸福なのです」

「おれが家を棄てゝ何處へか行くつて？。どうしてそんなことを思つてるのだ」

英吉は青褪めた凄い目顔をしたおとよに、自分の胸の中を見破られたやうな氣がして、恐怖を感じた。

「私はこれまでの一生に、市太の外の誰れにも愛されも慕はれもした覺えはないし、此から先も私のことを思つて呉れる者はないに極つてるのですから、生きてゐたつて何の張合ひもありませんよ」

「おれをそんな冷酷な人間と思つてゐるのか。二十年以上一緒に暮らして來たのに、まだおれの心が解らないのかい」

英吉が悲しげにさう問詰ると、おとよは默つて首を垂れた。涙が彼女の頰を傳はつた。

おとよは夫を惱ましたゝめにいくらか氣が晴れて、階下の寢室へ下りて行つたが、英吉は妻の身の上に變事が起りさうなのを氣遣つて、忍び足で寢室の側へ寄つて様子を覗づてから、茶の間に腰を据ゑた。無關心に時を刻んでゐる柱時計の音が、今夜は不思議に彼れの耳に留つた。

やうやく就眠時刻が來たので、下女に戸鎖りをさせて先へ寢かせたが、自分は眠くもないし、妻と寢室を共にするのもいやな氣がして、長火鉢の側でしよんぼり夜を更かしてゐた。先日までそこらに漂つてゐた賑かな若い笑ひ聲が思ひ出されて、自分だち夫婦が若い者に背かれたことがますゝ身に染みて心細かつたが、出來た事を悲しむばかりで、善後策は何時まで立つても考へつかなかつた。そして、おとよは突然に暗闇から出て來ては、鬱憤晴らしに彼れに突掛かつた。

突掛つてゐるところへ、ふとトンゝと戸を叩く音がした。十二時を過ぎてゐるので、不吉の報知かと二人とも吃驚したが、聲を掛けると、來たのは明だと知れた。今の場合明でも來て呉れたのは、英吉に取つては幸福であつた。

明は、二人がまだ起きてゐるのを怪みながら、かの事件に關したその後の經過は訊かないで、

「あの事については、今後私は全く無關係な地位に立たうと思ひますが、その前に、五分間でも十分間でもいゝから、一度お仙ちやんに會はせて貰ひたいんですがね。さうして、綺麗にお別れをしたいのです」と、昂奮はしてゐたが、眞實らしい顔して云つた。

「君がさういふ氣になつたのは非常にいゝことだ」と、英吉は自分の心の負擔が一つ輕くなつたのを喜んだ。

「それはいけませんよ」と、おとよは神系的に首を振つて、お前の方から下手に出てあの女に會つて貰つてどうするんです。お時は先日間私には強さうなことを云つてゐながら、お仙ちやんには強い口が利けないものだから、見くびられて、こんな恥を掻かされるやうな目に會つたのだよ」

「そんなことはもうどうでもいゝです」

「お前の恥辱は私の恥辱にもなるんですよ」

「詰らんことを云ふもんぢやない」と、英吉はおとよを制して、明に向つて、靜夫と仙子の樣子を見たまゝにあらまし話して、「君も諦めて、男らしく二人を許してやるんだね」と、事もなげに云つた。

「えゝ……」と、明は込上るいろ〳〵な思ひを壓へて氣のない返事をして、「私はたゞ一度會ひさへすれば、それで事が濟むんです」

英吉は、潔い明の諦めによつて、善後策に一つ光明が差したやうに思つて、調子づいて、その勢ひで直ぐに仙子の兩親に宛てゝ手紙を書かうとして二階へ上つた

「ぢや、居所も分つたんですね」と、明はおとよに向つて念を推した。

「叔父さんはあの女の最屁ばかりしてゐなさるけれど、お前は踏付けにされて何とも思つてゐないのかい。……道に外れたことをしてゐる者に何故天罰が當らないのかと、私は不思議でならないよ」

「天罰はどうか知らんが、白井の手に乘つてゐちや、お仙ちやんも今に酷い目に會つて後悔するに極つてゐるんだ」

「お仙ちやんがゐなくなつたら、お前も滅多に此家へ遊びに來なくなるだらうし、私はこれからどうして日を暮したらいゝんだらうね。白井だつて、叔父さんや私を懐しがつてるやうに、口先では云つてゐたけれど、本當はお仙ちやんに迷はされて家へ來てゐたのだから」

「白井の同居を歡迎したのは貴女なんですからね」

明は皮肉に云つた。叔母が靜夫に魅せられてゐるかも知れないといふ幽かな疑念を、今夜はこと更に誇張して見詰めた。

しかし、明の來て呉れたお蔭で、夫婦の中も稍和らいで、眞夜中過ぎから、寢室へ炬燵を置いて、安らかな眠りに就いた。

書生部屋には靜夫の荷物が散らかつてあつたので、明は叔母の差圖で、仙子の居室へ寢床を延

べることになつたが、彼れはそれを幸ひにして、彼女の所有物のすべてを手當り次第に取出して見た。白革の手箱には明自身の寫眞も入つてゐた。手紙は思ひ出になるやうなのは一つも見當らなかつたが、彼れがクリスマスの贈り物にした日記帳は机の引出に入つてゐたので、彼れは何よりもそれに好奇心を寄せて披いて見た。書入れてあるところは四五日に過ぎなかつたが、元日の書初からして、一句一句が彼れの胸を衝いて、讀みつゞけるのは堪へられなかつた。矢鱈に用ひられてゐるSといふ符牒が誰れを差してゐるのかは考へるまでもなかつた。ことに、先日の夜靜夫と×××軒で飲んでゐた時に、靜夫を電話で呼出したのは、仙子であつたのだと、日記によつて知れると、彼れは身體中の血が頭へ上るのを感じた。……あの時には靜夫に揶揄はれるのも忍んで、自分の戀に對する同情を求めてゐたのであつた。

明は荒々しく日記帳を引き裂いて、憤怒に燃えた目で空間を見詰めた。最早平靜な態度で仙子に最後の別れを告げようといふ自ら欺くやうな氣持にはなつてゐられなかつた。身を棄てゝでも存分に復讐しないではゐられなくなつた。

夜は容易に明けなかつたが、彼れは復讐の手段をさま〴〵に考へて、ことに及ぶ限りの殘忍な復讐を空想して辛うじて時を過した。明け方になつて眠りに落ちると、恐ろしい夢に襲はれて魘

されたが、誰れも呼醒まして呉れる者がなかつた。

朝家の者よりも早く寢床を離れて、冷水で頭を冷して、空つ風の吹いてゐる戸外へ出て行つた彼れは、殘忍な復讐の夢を稍吹醒まされながらも心覺えのある三田の古道具屋まで行つて、價格にかまはず、鋭利な短刀を買つた。そして、近所のミルクホールへ寄つて、麵麭と牛乳とで朝食を濟ましたが、其處へ入つて來た三四人の學生に對しても、何となく敵意が感ぜられた。道を歩いてゐても、通りすがりの男に對して、自分の方に强味が出來たやうに思はれたりした。家へ歸ると、新聞に包んだ短刀を書生部屋へ隱して置いて茶の間へ出た。

「何處へ行つてゐたのだ」と、英吉に訊かれると、

「少し胃の加減が惡いから、朝食に牛乳を飲んで來ました」と答へた。

「血色がよくないよ。あんまり頭を使ひ過ぎんやうに氣をつけなさい」

「なに大丈夫です」

明は悟られないために快活を裝つてゐたが、仙子などの居所を叔父に問糺すのは後見たくつて躊躇された。仙子に會はせやうといふ昨夕の約束は、忘れたやうに、叔父の方からは云ひ出さなかつた。

英吉はこれから校長を訪ねて辭職の決心を告げて來ると云つて、長年勤めて來た職務から退くに就ての感慨を洩らしてゐたが、するとそこへ宮川と云ふ知人が訪ねて來た。靜夫の家とは緣續きになる家の主人なので、持つて來た用事は三人の頭には直に察せられた。英吉はこんな世事に通じた男が間に立つて呉れることを一も二もなく喜んで、二階へ上げて面會した。

明は、こんな仲介者が出て來ては、靜夫がいよ〳〵圓滿な勝利を遂げるのだと忌々しく思ふとともに、稍々弛みかけた復讐心に新たな刺戟を受けた。そして自分を腑甲斐なしと思つてゐる叔母も、今に驚くだらうと、おとよの顏を見やつた。

宮川は用談を濟ました後で、「久し振に奥さんにお目に掛りたい」と云つたが、おとよは會はうとしなかつた。

重荷を卸したやうな安易を覺えた英吉は、客を送り出してから、取極められた話の要點だけを、二人に向つて話した。明の手前、存分に自分の喜びを打明けることは出來なかつたが、宮川の計らひで正式に婚禮の運びがつくやうになることなら、費用はいくらでも出して、それによつて自分の不行屆きの償ひにしようと思つてゐた。

「お仙ちやんは貴下の身内だから、どうにでも貴下の御勝手になさるがいゝ。私は何にも云ひ

ますまいよ」とおとよは望みのない爭ひに疲れて、拗ねたやうな口を利いた。

明は默つてゐたが、腹の中では叔父のお目出たい量見を嘲笑つてゐた。さう簡單に事が濟むものか濟まして置かれるものかとひそかに思つてゐた。

英吉は憂鬱に沈んでゐる二人を引立てるやうに、新聞の記事などを種にして、いろ〳〵に話を仕向けて、ついぞ目を留めたことのない演藝案内をもあさつて、「どうだ。去年からの約束を實行して芝居を見に行つちや。おれも一緒に行くよ」と、調子づいて云つたが、明は生返事をして、英吉が讀上げる各座の出し物や役者の名前について、説明をも與へなかつた。

「それよりも、私は少しの間寢かして貰ひませう」と、明は興もない話を聞かされてゐるのに堪へかねて、仙子の部屋へ退いて、心を一點に凝らしながら、夜着を被つて横になつた。すると、英吉も所在がなくて、緣側へ出たり庭へ下りたりした揚句に、何をするといふ當てもなく、二階の書齋へ上つて行つた。

一人取殘されたおとよは、昨日靜夫が取亂したまゝになつてゐる書生部屋の亂雜な樣が氣になりだしたので、下女の手を借りて、荷物を片隅へ寄せて拭掃除をした。そして、元のやうに不用な部屋になつたのを見て、哀れを感じてゐたが、さうしてゐる間に今何の氣なしに鞄の上へ置い

た新聞包みの一端にふと目がついた。手に取つて開けて見ると、意外にもそれは鞘に入つてゐる双物であつた。

臺所道具以外には、双物といふものを、殆ど見たことのなかつたおとよは、魔力をもつて光つてゐる双先を見ながら震ひ慄いた。「靜夫が何のためにこんな物を持つてゐたのか知らん」と怪しみながら、刀を鞘に收めたが、其處へ抛り出して置くのは危險なやうでもあるし、自分のためにその危險な双物が役に立ちさうな氣がしたので、袖で隱して茶の間に持つて來て、そつと箪笥の引出へ仕舞つた。

仕舞ひ込んだ後でも、魔力をもつた双先は彼女の目の前にちらついた。自分で死ぬるにしても、そんな痛さうな恐ろしい双先にかゝつて死ぬる氣にはなれなかつたが、人間の生命を絶つことくらゐは雜作のないことが、しみ〴〵と感ぜられた。……將來に幸福のある筈のない世を棄てゝ、市太の靈魂の後を追つて行くのは雜作もないことを、神樣が敎へて下すつたやうにさへ思はれた。

二階から下りて來た英吉は、明がよく眠つてゐるのを見定めてから、おとよに向つて、「此方から宮川へ通知してやり次第、今夜でも明日でも、お仙を連れて來て、結婚の式を擧げるまで此處へ置くことに話を極めてゐるんだが、それについちや當分明の出入は止めなきやならないよ。お前

から當人の氣に觸らないやうによく話をつけといて呉れ」と、小聲で云ふと、
「私からそんなことは云へませんよ。云ひたくもありませんよ」と、おとよは口を利くのも煩さうに卒氣ない返事をした。
「當分旅行して居てくれゝば、おれが旅費を出してもいゝんだがね。」
「人一人自分の自由にならないことが、貴下にはまだ分らないんですかね」
誰れにもかまはれないで眠れるだけ眠つた明が目を醒ました時には、英吉は湯殿へ入つてゐた。明は長い睡眠の力によつて、心の昂奮が稍々鎮まるとゝもに、短刀のことを思出して、人に見つけられぬ間にと、書生部屋へ取りに行つたが、何時の間にか部屋の中が整頓されてゐたので驚いた。短刀を包んだ新聞紙のみが鞄の側に置かれてあつた。誰れかに見つかつて取上げられたことが知れると、最早自分の不穩な計畫までも見破られたやうな氣がして、居たたまらなくなつたが、茶の間の方へ行つても、叔母が知らん顏して、短刀のことなんか訊かうともしないので、一層底氣味が悪くなつて、突如に暇を告げた。
叔母が慌てゝ引留めるのを耳にも入れないで家を出たが、自分の夢のやうな企圖が見破られてゐると思ふと、この後彼家へは足を向けられないやうな氣がしだしたので、一生の見收めのつも

りで、家の方を振返つて見詰めた。……旨く行つたら、あの家の一切が、仙子をも附けて、自分の所有になる筈であつたのにと、つい先日までの樂しい夢を思出すと、今の自分が一圖に自窄らしく見られた。薄日の照つてゐる周圍の眺めも、今日はことに寂しかつた。

叔父が短刀の意味を察してゐるとすると、此方からいくら眞心で言譯しても、仙子には會はして呉れないだらうし、自分一人では靜夫を押退けて仙子に會へる望みはないのだしと、明は自分の心の遣場のないのに萎れた。萎れるにつれて、平生よりも靜夫が一層強い優勝者のやうに見えだして、それに逆らふ力もなくなつた。

彼れは下宿屋へ歸りたくはなかつたが、友人など訪ねる氣にもなれなかつたので、不承々々に宿へ歸つた。年末からかけて、殆ど自分の宿に居つゐてゐたことはなかつたので、讀みかけの書物は長いこと一つところに栞りを挾んだまゝ、同じところに置かれてあつた。が、今日は珍らしくその書物を取上げて、それより外に時間を過す術のないやうに、努力して讀みつゞけたが、目先で文字を辿るばかりで些とも理解は出來なかつた。

日暮れまでさうしてゐて、久し振りに不味い下宿の飯を食べてゐたが、そこへ、電話の掛つて來た知らせがあつた。箸を擱いて駈出して聞くと、意外にも相手は靜夫であつた。

「是非君に會ひたいから、例の愛宕下の××軒まで來て呉れ」と、靜夫の聲は柔しかつた。
「何のために僕を呼ぶんだ」と、明は不思議に思ひながら、責詰るやうに訊いた。
「君のためにも會つた方がいゝと思つてるのだ。なんなら僕の方から下宿をお訪ねすることにしてもいゝよ。……しかし、どうしても會ひたくないと、君が云ふのなら、强ひてとは云はないよ。これでお別れにしよう」
「ぢや、兎に角僕の方から××軒へ出掛けることにしよう」
「さうか。ぢや、先へ行つて待つてるよ」
明は急いで部屋へ戻つて、食べかけの食事を抛ちらかして、「石田さんはこの頃どうかしてゐらつしやるわね」と、下女が呆れて見てゐるのを見向きもしないで、表へ飛出した。自分を侮辱した男に呼寄せられるのを、いゝ氣になつて此方から會ひに行くのは、いかにも不見識なやうで、キッパリ斷らかつたのを後悔しながらも、電車の速力がもどかしく思はれるほどに、道が急がれた。……若しかすると、仙子も一緒ではないかと疑はれて、二人の冷笑を買ふのが氣遣れたが、どちらかと云へば彼女のゐる方が望ましかつた。
彼れはふと、折角手に入れた短刀を失つたことを遺憾に思つた。どうもしないにしても、あれ

を持つてゐれば、靜夫に對して、ゐる間、どれほど心丈夫だか知れないのにと。

明が××軒の二階へ上つて行つた時には、靜夫は女中を相手に笑ひ興じてゐたが、明の姿を見ると、自から心が緊張して、戯談らしい話は打切つた。女中を遠ざけて明を迎へるとゝもに、明に對しては嘗て見せたことのないやうな生眞面目な態度で、

「でも、よく來て呉れたね。君は僕に會ひに來ちや呉れないだらうと思つて、電話を掛けるにも餘程躊躇したのだよ」

「……どう云ふ用事なんだ。僕のためにも會つとく必要があると云ふことだつたが」と、明は胸をどきつかせながらも、努めて冷靜を裝つて訊いた。

「用事といふものでもないが、僕も一生の運を極める場合に立つてゐるんだから、その前に豫め君の意向を訊いときたいと思つてる。……君は今お仙ちやんをどう思つてゐるね」

「僕を呼寄せたのはそれを聞くためなのか。……あんまり馬鹿にしてゐぢやないか」

「いや僕は眞面目で訊いてゐるのだよ。君がまだお仙ちやんのことを忘れないで、僕等に對して不快に思つてゐるのなら、僕は自分の方針を少し考へ直さうと思つてる」

「だつて君は宮川さんを叔父の家へ寄越して結婚の相談までさせたのぢやないか。叔父の口吻

がさうらしかつた。……今更君が考へ直したつて、それがどれだけ僕のためになるのだい」

「宮川さんには結婚の周旋を頼んだ譯ぢやないがね。それは兎に角、僕の今の考へでは、先生をはじめ、君だの飯倉の叔母さんだの皆なが快く同意して呉れないかぎりは、斷じて結婚はすまいと思つてるよ。結婚と云へば一生のことだからね。一生懸意な人の怨みを買ふやうな結婚をするのは愚の至りだからね」

「……」明は何か云はうとしながら、適當な言葉が見つからないやうな、呆然たる顏して相手を見詰めながら默つてゐた。

「先日の晩、この家でそれとなく君に打明けたやうな初戀見たいな強い感じを、お仙ちやんに對して僕が有つてゐるにしたところが、皆なの反對を押切つてまで結婚しちや、第一お仙ちやんの爲めにならないからね。一時の感情のために、あの女に一生の不幸を背負はせるのは氣の毒だからな」

「ぢや、結婚さへしなければ事が濟むと思つてるのかい」明は呆れて云つたが、何にしても、結婚の中止は自分に取つて惡い氣持はしなかつた。

「濟むか濟まぬか、僕の力で及ばないことは仕方がないね。……君は僕が結婚しても不服に思

はないか、遠慮なく云つて呉れたまへ」

「僕は兎に角、叔母は決して喜んでゐやすまいよ」

「恩のある叔母さんの御機嫌は害ねたし、君の希望も妨げたし、僕は詰らないことをしたものだ。申譯がないと云つて方々へ頭を下げてお詫びをしなければならないが、しかし、結婚前に自分の所行の愚なことに氣がついたゞけが、まだしも幸福だつたよ」

「ぢや、君はもうあの女を棄てるつもりなのか、早晩そんなことになるだらうとは豫期してゐたが、かう早く心が變らうとは思はなかつた」

明は口では責めるやうに云つたが、おきくの事件のあつた時のやうな義憤は感ぜられなかつた。靜夫の冷酷な心が意外に早く動いて、仙子が無慘に拋棄てられさうなのをむしろ小氣味よく思つてゐた。

「棄てるの棄てられるのと、そんなんぢやない。お仙ちやんは僕の心を信じてる筈だよ。だけどこのために一生憎まれものになつて暮しちや、あの女の不幸だと思ふから。……それとも君たちは僕等の結婚を快く許して呉れるだらうか。若しも快く許して呉れゝば、思ひ合つてる仲だから、こんな嬉しいことはないんだが」

「あの女は元の仙子ぢやないのだから、君と離れやうが、離れまいが、僕には何の關係もないのだ」

明は投げつけるやうに云つたが、自分の言葉に感動して目を潤ませた。

「君が快よく許して呉れさへすれば、僕は他に求むるところはないんだ。お仙ちやんを君に會はせてもいゝんだよ。僕だちの居所を今君に明してもいゝ」

やがて靜夫が事もなげにかう云ふのを、明は半信半疑で聞いたが、仙子に會ひたい思ひは胸に込上つた。

「君の居所は叔父がよく知つてゐるんぢやないか」と、つとめて無關心な口調で云つたが、

「芝口の宿屋かい。昨夕から彼家にはゐないよ」と、答へられると、

「ぢや、何處だ？」と、思はず問詰めた。

「君が知りたいのなら、敎へようか」と、靜夫は指先で食卓の上に大きく書きながら、一字一字「分つたか」と念を押して、「二人とも手ぶらだから何處へ行かうと身輕なものさ。ことに僕なんざ、全くの宿無しなのだからね。宿を定めるのは僕の性に合はないやうに思はれるよ。その點は君よりも僕の方が不幸かも知れないね」

「だけど、愛宕下の下宿には長くゐたぢやないか」
「さうさ、同じ役所へも長いこと通つてゐるし。僕も辛抱人の素質が全くないぢやないのに、どうも變だよ。自分でも分らない」と、靜夫は食卓の上に暫く出鱈目な文字を書續けてゐたが、やがて顏を上て、「僕はこれから原口のところへ、些つとした用事があつて行かうと思つてゐるんだが、一緒に行かないか。君もあの男を知つてゐるだらう」
「あゝ」明は他の事を考へて居たので、空返事をした。
「君が何も食べないのなら、もう出て行かうか」
靜夫が椅子を離れて二階を下りて行くので、明も隨いて下りたが、何のために此家へ招かれたのやら分らなかつた。最早善惡とも一切の蟠まりの取れてしまつた後の友人のやうに、靜夫が原口のことなど知人の噂をするのを聞流しながら、明は電車道迄一緒に歩いて行つたが、其處で別れを告げた。
「君は下宿へ歸るのか」と、靜夫は强ひて同行を勸めないで、異つた方の電車に乘つた。
明は靜夫の乘つた電車の行過ぎるのを見ながら、胸を轟かせてゐた。そして、愛宕下からは直近くの琴平の方へ足を向けた。この機會を取逃がしては仙子に會ふ望みはないと思はれて、頻に

心が急がれた。靜夫の知らせ振りがあまりに無雜作だつたので、多少の疑ひを抱いてゐたが、聞いたところを捜して見ると、その名前の宿屋は確にあつた。

突然に訪ねても仙子の方で會はふとしないのは分つてゐるので、帳場にゐた主婦に向つて、靜夫を名差して面會を求めて、不在と聞いて、歸つて來るまで待合はせることゝした。

空いた部屋へ通された明は、火鉢を持つて來て呉れた小い女中に向つて、靜夫の部屋は何處かと、何氣ない顏して訊いた。廊下の突當りの右手の部屋だと、女中は明らさまに敎へた。

「連れの人がゐるだらう。今どうしてゐるかね」

「只今お風呂へ入つていらつしやるでせう」

「さうか」

明は煙草一本吸ふ間だけ辛じて我慢してゐたが、やがて廊下へ出て、誰れにも見られてゐないのを幸ひに、突當りの部屋へ入つて後を締めた。若し他の客の部屋だつたらと氣遣つて、左右を見廻すと、床の間に小形の聖書の置かれてあるのに目がついた。外には此室の客の持物らしいものは一つもなかつたが、その聖書は此室の客の誰れかといふことを分明に敎へてゐた。

「何のために聖書なんか持つて來たのだらう」と、明は可笑く思ひながら、火鉢を隔てゝ二つ

敷かれてゐる座蒲團の一つの上に腰を卸して、仙子の足音を待つてゐた。

會つたら何を云はうとか、どうしようとか、明の頭にはハッキリした考へは浮んで來なかつた。そして、手持無沙汰でゐるのは間が悪かつたが、他には一枚の古新聞さへ見當らないので、唯一の讀物たる聖書を持つて來て、徒らにページをめくつてゐた。

部屋の前のスリッパを見た仙子は靜夫が歸つて來たことゝ思込んで、何氣なく障子を開けたが、それと同時に此方を見上げた明と目を見合はせると、血相を變へて闕の上に立竦んだ。

女が逃出しやしないかといふ咄嗟の恐れから、明は慌てゝ座を立つたが、仙子は障子を開放したまゝ入つて來た。

「僕は今白井に會つて此家を聞いたのです。途次手に寄つたのだから、長くはゐませんよ。僕も女一人のために亂暴な眞似はしないから安心してゐなさい」

明は怒つたり責めたりするよりも、先づ相手の心を和らげて、火鉢の側の座蒲團の上に坐らせたかつたが、仙子は明の心を推量りかねて、入口に近いところへ坐つて、目は油斷なく明の顏の方へ注いでゐた。

「貴女は僕を恐れてるんだね。恐れてるのは良心に疚しいところがあるでせう。」と、明は冷笑

とも苦笑ともつかぬ笑ひを浮べながら云ふと、

「私貴下に對して疚しいことがあるとは思つてやしません」と、仙子は卒氣ない返事をした。

「貴女が口先でさう云つたつて駄目だ。自分の心によく聞いて御覽なさい。貴女がいくら白井に迷はされたつて、良心をまるで失くしてる譯ぢやあるまいから。……だけど、僕は今夜貴女を咎めに來たんぢやないんです。たゞ僕が何時までも貴女に未練を有つてるやうに思はれちや殘念だから、さうでないと云ひに來たのです。それだけを貴女に信じて貰ひさへすれば、他に何も云ふことはないんですよ」

「信ずるも信じないも、私はじめからそんなことを思つてやしません。叔母さんの身内の方としてお交際してゐたのですもの」

しらぐしい言草に、明は呆れながらも、今の場合、何よりも先づ女と親しくなりたい一念に驅られてゐたので、「ぢや、これからも僕を身内の一人として交際ふと云ふんですか。僕の方でそんな氣になりさへすれば」

「えゝ。……だけど、貴下はあの人に好意を有つてゐらつしやらないんだから。……私もこんな馬鹿な女だといふことがよくお分りになつたでせうから、これから私のことに關はないやうに

して下さいね」

「そりや僕もかうならん前にこそ、白井といふ人間について、貴女の氣に障るやうなことも云つたのだけれど、今となつちや餘計な差出口は利きやしないさ。貴女のしたことが一生の幸福になるやうにと望んでゐるんだが、しかし、白井は先つき僕に妙なことを云つてゐましたよ。あの男は以前からさういふ風だつたけれど、今夜の話は特別に僕の腑に落ちないんです」

「今夜はどんな話をなすつたの？」

仙子は廊下の足音を氣にして障子を締めたが、元のところへは坐らないで、火鉢の側へ寄つて來た。此間まで馴親しんでゐた仙子とは人が違つたやうに大人びてゐて、側へ近よられると、明の目には眩かつた。相手の心を惹くやうな話をしたがつてゐた明は、相手の問ひを幸ひに、夕方電話で呼出されてからの一伍一什を洩れなく話した。自分の無關心と靜夫の冷淡とをいくらか誇張した外には、話に作爲を加へなかつた。

「どういふつもりか、白井は自分の方から居所まで打明けたのですよ」

仙子は聞終ると目を伏せて、暫く微塵動ぎもしないで考へ込んだが、すると、明の方でも同じやうに、靜夫の氣持について考へだした。

「原口さんてどんな方？。貴下も知つていらつしやるの！」と、やがて仙子が訊くと、

「叔父の家で一二度會つただけです。何處かの學校の教師をしてゐるんでせう」と、明は答へた。

仙子は再び目を伏せて考へ込んだ。

「貴女は取返しのつかないことをしたのだ。白井の旨い口に乘せられたために、叔父さんや兩親に心配を掛けるし、貴女自身にだつて決してい丶事はないんだ。白井が僕に云つたことで貴女の運命は大抵想像がつくんだから」

明はやがて沈默を破つて云つたが、仙子は相手の言葉に耳を貸さないで、不安な思ひをして靜夫の行方を追つてゐた。

「僕はこの後叔父さんの家へは出入りしないつもりだから、貴女にもこれつきり會はないかも知れないが、僕の云つたことはよく覺えてゐて下さい。後で屹度思當ることがあるでせうから」と、明は今にも歸つて行きさうに座を立ちかけながら、また腰を据ゑた。

「それだけのことを私に仰有つたんだから、他にはもう御用はないんでせう」と、仙子は無愛想に云つた。

明は顏を紅らめてドギマギしながら、「僕の方ぢや、もう何にも云ふことはないけれど、貴女の

方では云ふべきことがある筈だ。貴女とはこれが一生の別れになるかも知れないんだから」

「私何にも申上げたいことはありませんの……これでお別れにしますわ」

「貴女とは可成り長い間親くしてゐたのだが、こんな風で別れても、貴女の方ぢや心殘りがないんですか。……僕は怨言なんか一口も云はないが、貴女はそれでいゝ氣になつてゐられるんですか」

「私かういふ女なのですから仕方がありませんわ。闕はないでゐて下さいな」

仙子は夫どころではないので、明が何時までも側にゐるのを目障りにして、つと立つて、往來に面した窓際へ寄つて、風の寒いのもかまはずに戸外の夜を見やつた。そして、往來の下駄の音の中に靜夫の歩き振りの聞かれるのを待ちあぐんでゐた。

嘘にでも涙をもつて詫びるだらうと豫想してゐた明は、相手が意外に剛情なのを忌々しく思ひながらも、鬱憤を晴らす力は萎へてゐた。女の後姿を見たり、部屋の中を見廻したりして、落着かぬ氣持でゐたが、やがて、ふと柱の側へ寄つて呼鈴を鳴らした。

仙子は振返つて、「どうするんです」と、驚いたやうに訊いた。

「煙草が無くなつたから」と云つて、明は口輕に、お茶を一杯奢んで貰ひたいもんですね」

「氣がつかないで濟みませんでした」

寒さに震へてゐた仙子は、それを機會に、火鉢の側へ戻つて來て、御用を伺ひに來た女中に向つて、煙草と茶と外に、お菓子をも命じた。

「僕は先日中自分でどうしていゝか分らないやうに迷つてゐたけれど、今日は貴女を苦めに來たんぢやないんです。實は僕も飯倉の家で事情を聞いた時には、一時クワッとして復讐でもしてやれといふ氣になつたのだが、そんなことをするのも男らしくないと直に思ひ直したのだから、貴女もそのつもりでゐて下さい。僕は白井のやうに他人の幸福を妨げないでも、自分だけで生甲斐のある日を送るやうな道をつけることはいくらでも出來るんだから」と、明は茶や菓子の些細な待遇によつて、俄に親しみを感じて、打解けた口を利いた。

「私は貴下が早く學校を卒業なすつて、御出世なさればいゝと思つてゐますわ」

「早くと云つても、時が來なければ卒業出來やしないさ。……それにこの頃は學校なんか卒業したつて詰らないやうな氣がして、勉强する張合ひがなくなつてゐるんです」

「何故ですの？。叔父さんも叔母さんも貴下の御卒業を樂みにして待つてらつしやるんぢやありませんか」

「……」だけど貴女は元のお仙ちやんぢやないしと、明はあらはに口から出すのを我慢するとともに、目に涙を浮べた。

明の目に浮ぶ涙を見た仙子は、火鉢に翳してゐた手を思はず引込めて、身體をも稍退けた。

「私にも心配事があるんですから、この上悲しいことを聞かせないやうにして下さいな」

仙子の哀れつぽい言葉は、ます〳〵明の涙を刺戟した。

「私は叔父さんにも愛想を盡かされてるでせうから、この先い〻事はありやしませんよ。貧乏もするでせうし苦勞もするでせうからさうしたら、い〻氣味だと貴方は蔭で笑つてらつしやればいいぢやありませんか。」

「僕はそれほど殘酷ぢやないさ。……貴女が一時の心得違ひを多少でも後悔してゐるのなら、今夜にでも一刻も早く飯倉の家へ行つてお詫びをして、後の處置を叔父さんに任せることにしなさい。懺悔をするものを叔父さんは咎めやしないだらうから。……僕が今眞心から貴女に勸めるのはそのことなのです」

明は潔く最後の別れを告げる氣になれなくなるとゝもに、靜夫が今にも歸つて來るかと案じられるので、どうかして仙子を外へ連れ出したかつた。

「それはお詫びをする時節が來たら、叔父さんにでも誰れにでもお詫びをしますわ。」

「だけど愚圖々々してゐる間に、貴女が一人ぼつちになつて行場がなくならんとも云へないが、さうなつてからのお詫びぢや、お詫の價値がなくなるだらうからね」

「妙なことを仰有るのね。……行場がなくなつても、誰れのお世話にもなりやしませんよ。私には私の覺悟がありますの。……お詫しろ、懺悔しろと、貴下は仰有るけれど、私本當はそんな氣になつてゐやしませんの。自分で自分の仕末をつけさへすれば、誰れにも謝まる必要はないぢやありませんか。無教育な私にでもそのくらゐなことはよく分つてゐますわ」

「生意氣を云ふもんぢやないよ」

明ははじめて突慳貪な口を利いたが、仙子は皮肉な笑ひを口元に浮べて、「何が生意氣ですの？」と、冷かに靜かに云つた。

「自分で考へたら分るぢやないか」

明はそう云つて、手にしてゐた吸餘しの煙草を拋棄てゝ、荒々しく障子を開けて部屋を出た。

そして空部屋に置いてゐた帽子を取つて、周圍に目もくれずに戸外へ出て、蒼褪めた顏を寒い埃風に曝しながら、當てもなく歩いた。先日教會で見た仙子の冷酷な目附と、先つきの皮肉な笑ひ

とは、終生忘れがたいやうに深く彼れの心に刻まれた。

仙子は明が出て行つた後でハラ〳〵と涙を落とした。靜夫がこのまゝ歸つて來ないのぢやないかとさへ疑はれて、一刻も座に安んじてはゐられなかつた。明が坐つてゐた靜夫の座蒲團や、火鉢の側の茶盆や聖書などが、自分一人を置いてき堀にして行つた者の遺物のやうに淋しく見えた。

で、靜夫の足音が廊下に聞えるまでに、仙子はいく度立つたり坐つたり、死を決したりしたか知れなかつた。

「お客様があつたんだつてね」と、靜夫は部屋へ入ると云つて、わざと顏を背けて拗ねた素振りを見せてゐる仙子の顏を、笑ひ〳〵覗き込んだ。そして土產の西洋菓子の箱を開きながら、問はず語りに手間取つた譯を話した。

「貴下は宮川さんのお宅へ入つしやつたんぢやないの？」と、稍心の融けた顏を上げて訊くと、

「宮川がゐなかつたから、原口の家へ行つたのさ。貴女は明君の云ふことをその通りに眞に受けちやいけないね。僕はあの人を恐れて逃隱れしてゐるやうに思はれるのはいやだから思ひ切つて居所を知らせたのだが、僕の留守を狙つて訪ねて來ようとは思はなかつた。……それでどんなことを云つたの？。亂暴なことはしなかつたんですか」

「そりや意氣地のない譯の分らない人。まさかあんな詰らない人とは思はなかつた。男つて皆なああなのか知らん」

「少し耳が痛いね」

靜夫は仙子の指先と擦れ〳〵に冷たい手を溫めながら、留守中のことを面白さうに聞いてゐたが、仙子が明を凹ましたことを必ずしも喜んではゐなかつた。むしろ物足りない氣持がした。

仙子は一しきり得意げに話してゐたが、明の云つたことは、さう容易くは消しがたいやうに彼女の心を蝕んでゐたので、靜夫の腹の中の考へに多少の不安を感じて、一日も早く確實に家を持たうと焦りだした。

「はじめから貧乏を覺悟してゐるんだから、どんな汚い家だつて狹い家だつて構やしませんよ。宮川さんのお取成しなんかを當てにして、こんな宿屋で愚圖々々してゐちや詰らないぢやありませんか。今夜のやうに貴下が勝手に出歩なすつた後で、私一人ボンヤリしてゐるのは私もう懲々しちやつた」

「僕だつて早く落着きたいと思へばこそ、原口を訪ねて、貸室か空家かを搜して貰らうやうに賴んで來たんです。世間的に極りをつけるまで、少しの間、貴女も淋しいくらゐは辛抱しなきや

駄目だね。……明君に突かれたくらゐで慌てるやうぢや、僕はこの先が案ぜられてならない」

「私あの人に突つかれたくらゐで騒ぎ出しやしないわ」

仙子がムキになつて辯解するのを、靜夫は輕く受流して居たが、五六日以來の初戀らしい經驗に彼は最早倦んでゐるのであつた。倦むにしてもあんまり早過ぎると、自分ながら不思議に思はれたが、そのいやな氣持を自分でどうすることも出來なかつた。相手の女の顏形が見醒めがしだして、女の甘へた言葉付が味も卒氣もなく思はれだしたばかりでなく、相手の身體や心のすべてに、何といふ理由を附しては云へない嫌惡の感じが感ぜられだしたのであつた。……數日の經驗は、普通の人が五年七年を經て感じるやうな氣持を、彼れに感じさせた。……「今度こそと樂みにしてゐたのに、矢張り駄目なのか。あれだけ手數を掛けてやうやく得た寶もおれの手に入ると、こんなに色も艶もない荷厄介なものになつちまうのだ」と、彼れは戀人と臥所を共にしながら、先日までの獨り寢の氣樂さを思ひ遣つてゐた。そして、自分のやうな男よりも、女に未練を殘して獨り寢の夜の枕を濕らせてゐる明の方がどれほど幸福かも知れないと羨んだりした。

「何時までも着替への一枚も持たないでゐても不自由だから、今日は宮川にでも賴んで、差當つて必要なものだけ、飯倉から取つて來て貰はうかな」と、明け方に目を醒ますと、獨り言のや

うに云つた。

「ぢや、私も連れて行つて下さいな。次手に空室を搜したいから」

「だけど、貴女と一緒に宮川の家へ行く譯には行かないからね。結婚式を濟まさない前に、仲人の家へ二人連れで行くなんて例のないことだから、そんなことしたら、宮川は眉を蹙めるだらうよ」

「世間の習慣なんて下らないものね」と云つて、仙子は冷笑したが、ふと氣付いたやうに、「習慣に從ふのも止むを得ないけれど、私一人で飯倉へ預けられることだけは斷然お斷りしてよ。宮川さんがいくらさう云つて勸めても、それだけは貴下からもよく斷つて置いて下さいね」

「えゝ。……」

「貴下は二度とそんな殘酷なことを私に勸めない約束をなすつたぢやありませんか。……たつたそれだけの私のお願ひを聞いて下されば、その代り、私今日は一人で此處でお留守居してゐますわ」

「僕だつて貴女を飯倉へやりたくはないさ」

靜夫は一時のがれにさう云つて、起きて朝餐を濟ますと、出來るだけ早く歸る約束をして戸外

へ出た。寒い日を當もなく歩くことの詰らなさをしみ〴〵覺えながら、いつそ豫定の馬鹿な企てに盲從して、仙子と結婚しようかと、退窟のあまりに考へたりした。

宮川の話次第で、「ぢや、よろしくお賴みします」と、手を突いて賴んで、人並に世帶を持つて見るかと、自問自答して歩いてゐる間に、ふと、おきくの事を思ひ出して、急に會つて見たくなつた。先方で今も尙此方のことを忘れないでゐるかどうか知らないが、何かの手段を用ひて無理にも會つて見たくなつた。

彼れは俄に生々した氣持になつて道を轉じた。

十七

おきくは靜夫に關しての夫の一時の疑ひを解いて、元の如く、少くとも表面だけは穩かに、三田の家に住んでゐるのであつた。

靜夫は仙子に關はつた一切の事を忘れてしまつたやうに、——あるひは厭はしい仙子のことが頭の底に澱んでゐるためと云つてもいゝか知れないが——一念をおきくの身の上に集めて、三田の方へ足を進めた。夫の横田が家にゐれば尙更だが、たとひ不在であつても、正面から訪ねておきくに會はれる望みのないことは分つてゐたので、その家の前まで來ながら行過ぎた。生花の稽古に出た次手だと云つて、二の日か七の日かに愛宕下の下宿へ寄つたことは覺えてゐたが、今日は運惡くその中のどちらの日でもないのだから、おきくの外出を豫期することは出來なかつた。

靜夫は間を置いて二三度その家の前を行きつ戻りつした。いくら焦つたつて、早急にいゝ機會の捉へられないことは分つてゐたが、いろ〳〵な連想の伴ふおきくの以前の態度を思出しながら、その家のほとりを歩いてゐると、異樣な快感が彼の肉體にも感ぜられるのであつた。

一先づ諦めをつけて、名殘の惜いやうな目付で家の方を顧みてゐると、下女らしい女が其家の勝手口から出て來た。靜夫は考へる間もなく傍へ寄つて、主人の在否を訊ねると、

「旦那樣はお出掛けになりました」と、下女は答へた。

「奥樣は？」

「病院へ入つてゐらつしやいます」

よく訊くと、おきくの入つてゐる病院は、先日まで靜夫のゐた愛宕下の下宿の直ぐ近所の婦人科の病院であつた。

彼れは雜作なくおきくに會へる機會がつくられたやうに喜んで、後へ引返した。そして、他人

に頼まれた事ででもあるやうに、不承々々に宮川の家を訪ねた。

「昨夜遅く、寢床に就かうとしてゐる時分に、飯倉の大將がやつて來たよ。その事でこれから君を訪ねようと思つてゐたのだ。丁度いゝところだつた」

さう云つた宮川の晴々しくない顏付は、自から何かの障礙を暗示してゐたが、靜夫は今度の事件に新な障礙の起るのを、むしろ待設けながら、「先生が六ヶ敷注文でも出したのですかね」

「山村さんは面倒なことなんか一言も云やあしないよ。あんまり手輕に極りをつけたがるので、却て此方で面喰ふくらゐなのだが、君は眞正に結婚する氣があるのかい。僕も間に立つた上は無責任なことは出來ないからね。……山村さんの昨夕の話を聞いてる間に僕も少し不安心になつて來たのでね。もつと腹藏のないところを君から聞いときたいと思つてるのだ」

「先日何もかも申上げた筈ですがねえ」と、靜夫は宮川の艶々しく禿げた額を見下しながら、腑に落ちぬ思ひをして云つた。

「いづれ君の方から誘惑したのだらうと思つてゐたが、山村さんの話しつ振りによつて見ると、さうでもなさゝうぢやないか」と、宮川は揶揄ふやうなニヤ〳〵笑ひを浮べて、「僕は君との關係から間に立つたのだから遠慮なく云ふが、お仙さんといふ女は純潔な人なのかい。君はこれまで

にいろんな噂のあつた男だが、しかし結婚となるとよく考へなければならんよ。一生連添ふ女の身の上についてよく調べもしないで、些つと氣に入つたから、是非女房にしたいと云ふのぢや輕卒過ぎるからね。第一女に眩まされるのは君にしちや不似合だよ」

「ぢや、あの女に何か後見たいことがあると思つてゐらつしやるんですか」と、靜夫は平然として訊いた。

「山村さんの妻君の甥とお仙さんと、これまでどういふ關係でゐたか、君はよく知つてゐるのかい。このことは君に取つては重大なことだよ」

「そのことですか」

靜夫は事もなげにさう云つたが、明と仙子との關係について、これまで思つてゐたよりも、もつと深入りして考へられだした。

「その事は重大だが、君はそれについちや一點の疑念も持つてゐないんだね」と、宮川に念を押れると、

「えゝ。……私は今の場合さういふ問題には觸れたかありませんよ」

「何故？。今の場合だからよく考へる必要があるんぢやないか。僕だつて、初心な男に向つて

こんなことを露骨に訊きやしないがね。君だから遠慮なく云ふんだよ。まさか、好きな女の祕密をほじくられて慌てるやうな君でもあるまいと信じてるから」

「私だつて相手の身の上についちゃ、相當に考へた上で、先日此方へお伺ひしたのですから、この上餘計な穿鑿をしようとは思つてやしません」

「さうかい、君が信じてるのなら、傍からとやかう云ふことは止さうよ。仙子さんの兩親から返事が來次第、早速結婚式に取掛るんだね。君がこれまでの生涯に區切りをつけて、堅實な家庭を持たうといふ氣になつたのは、僕も大に喜んでゐるんだから」と、宮川は五十男相應の分別臭い顔して云つて、「しかし、山村さんは僕の方から飯倉へ訪ねて行つた時とは大違ひで、昨夕は大變悲觀してゐたよ。君も今度いゝ妻君を得た譯だが、その代りに山村先生といふ資產のあるいゝ保護者を失つたのだね」と、君にも似合はないと云ひたけに、靜夫の顏を見入つた。

「先生は人がいゝから、貴下にいろんな內輪のことをこぼしたんですね」

「あの人も人がいゝのだかどうだか。上べだけぢや分りやしないよ。惡黨らしい君の方が案外お人よしなのかも知れないぜ」と、宮川はハッ〳〵と高笑ひをした。

靜夫は苦笑した。そして、結婚の準備について多少の打合せをしたり、自分と仙子との所有物

の一部を至急に飯倉から宿屋の方へ送屆けて貰ふやうに頼んだりして、居心地の惡いこの家を出た。……平生は意地の惡いところがあるとは思はれなかつた宮川の言葉も、今日はいやに皮肉に聞かれた。その上聞流して濟ましては置けないやうに、靜夫の胸に痛く刻まれた。

「明と仙子との間に後目たい關係なんかあるものか。それが分らないやうな頓間なおれと思つてるのか」と、彼れは平凡な邪推を嘲つたが、自分でも知らず〳〵、これまで親しかつた彼等二人の間柄について胸苦しいまでに想像をめぐらしだした。明が仙子の故郷で一夏を過したことが、新たな意味をもつて思ひ出された。そこにはどんな疑ひでも入れられる餘地があつた。……仙子の故郷の海岸は見たことはないが、中國筋から九州路へかけての海岸をよく知つてゐる彼れは、忌はしい妄想の背景は雜作なくいくらでもつくれるのであつた。小波の寄せてゐる軟い白砂を寢床にしてゐる彼等二人の姿態が思浮べられもすれば、微風に戰いでゐる神社裏の松林の中を歩いてゐる二人の姿を、幽かな月の光によつて見ることも出來た。……で、彼れは寒さに震へながら、心は海濱の夏景色に浸つてゐた。

「おれも馬鹿だな、こんなことを考へて。どうせ荷厄介にしてゐる女ぢやないか」と、やうやく氣がついたやうに妄想を振拂つて、道を急いだ。

しかし、彼れは、おきくのゐる病院へは行かないで、大人しく琴平町の宿屋へ歸つた。何もしないでボンヤリ待つてゐた仙子は、彼の歸りの意外に早かつたのを喜んだ。

「誰れも訪ねて來なかつたかね」と、靜夫は明を念頭に置いて訊いた。

「誰れも來る筈はないぢやありませんか。明さんはあれほど恥を搔かせたのだから、いくら何でも二度と訪ねて來りやしないわ」

「どうだかね」

多少の厭味を含んだ靜夫の言葉も、仙子の方では些とも氣に留めなかつた。

二人は旅にゐるやうな氣持で、一室に閉籠つて一日を過した。日暮れ頃に、靜夫の所有物を入れた鞄と仙子の着替へとが、飯倉の家から俥で屆けられた。それには、二通の手紙が添へられてあつたが、二つとも靜夫に宛てられたのであつた。英吉からのには、明日宮川が仙子を連れに行く筈になつてゐるから、一緒に歸つて來るやうに書いてあつた。

「それ御覽なさい。叔母さんは貴下にだけ手紙を寄越して、私には呉れないぢやありませんか。……どんなことが書いてあつて？」

仙子は氣遣はしくて、無理に覗いて見た。別段異つたことも書かれてはゐなかつたが、たゞ、「あ

なたの大切な品一つだけは、危いから、私が預つて置きます」と、書添へてあるのが、變に思はれたので、胡散くさい目をして靜夫に訊ねた。

「僕にも分らない。特別に大切の品のある譯はないんだから」

「だつて貴下の所有物が貴下に分らないつてことはないと思ふわ。危いからつて何だらう？。……貴下は私に隱して入つしやるのね。貴下と叔母さんとの間ではその暗號見たいな文字で事が分るんでせう」

「僕にも腑に落ちないね」

二人は互ひに暗號のやうな文字の意味について考へてゐたが、仙子はその手紙の上に叔母の目が怖さうに光つてゐるやうに思はれだしたので。

「私、これから鎌倉へでも何處へでも行つた方がよかないかと思つてよ。宮川さんに勸められても、叔父さんの家へ歸る氣にはどうしたつてなれないんですから」

「だけど、一日二日したら、僕も役所へ出なければならんし、貴女も一日中一人で此處にはゐられないだらうから」

「そんなこと何でもないわ、叔母さんや明さんの前で小さくなつてゐなきやならないことを思

へば、此處に一人でゐるくらゐ何でもないわ」
「何故小さくなつてる必要があるんです。僕は僕の妻と極つてる貴女が明君の前で小さくなることなんか絶對に望まないね。それとも、あの人の前では恐れ入つてゐなければならんやうな弱味を貴女は有つてゐるんですか」
「私の方には弱味なんぞ些ともないわ。だが昨夕もあの人に恥をかゝせたんぢやありませんか」
「どうかね。……僕が傍で見てゐた譯ぢやないから」
靜夫の口からはじめて厭味な疑ひの呟かれるのを耳にしたので、仙子は呆氣に取られてゐたが、やがて口惜しさうに辯護をしだした。涙を出していきり立つた。
「戯談だよ、それは」靜夫は下らないことを浮かり口へ出したことを、自分で自分を辱めたやうに後悔した。が、仙子は相手が冷然としてゐればゐるほど、獨りで昂奮して、假りにもさういふ疑ひを有つてゐられては、將來が案ぜられるから、疑ひを解くためにはどんなことでもすると云つて、
「だけど、貴下も私に隱してることを皆な打明けて下さらなきやいけませんよ。……他のことは兎に角、この手紙の意味を今此處で私の得心の行くやうに説明して貰ひたいの」

「そりや無理だわ。知らないことはいくら拷問されたつて云ひやうがないからね」
靜夫は肱枕をして横になつて、心を外の方へ遊ばせやうとしてゐたが、
「貴下も潔白なんですか。叔母さんも潔白なんですか」と、仙子が疊かけて訊くのに、今まで夢にも思はなかつた異樣な感じに打たれて、起き直つて、逆さまに此方から訊返した。
「潔白なんでせう。夫さへ聞けば私安心してゐられるんですの」仙子は相手が生眞面目になるのを見ると、自分の疑ひの恐ろしさにふと氣づいて、その話しは進め得なかつた。
「私、云つちまつたら胸がせい〳〵したんですから、貴下ももう氣に留めないでゐて下さいね」と、仙子は俄に顔を和らげて云つた。
しかし、靜夫の胸はちつとも晴々しなかつた。
靜夫は仙子の邪推を責めるよりも、あのおとよにもさういふ疑ひを挿まれるやうな慾念が動いてゐるのか知らんと不思議がつて、自分に對する彼女のこれまでの態度を熱心に思ひ出してゐたが、すると、次第に思ひ當るやうなことが浮んで來た。
「私が慎みのないことを云つちやつたから、貴下は怒つてゐらつしやるんぢやないの。勘忍して下さいね」と、仙子は萎れて云つた。

「僕はそのくらゐなことで怒つたりなんかしないさ。だけど、お仙ちやんにさへ、嘘にもさう思はれるやうだつたら、山村先生の家庭も憐れなものだね」

「眞正は叔父さんも叔母さんもいゝ人なんだから、貴下も悪く思はないやうにして下さいね。……私だちがちやんとした家庭を持つやうになつたら、あの二人の力になつて慰めて上げたいと思つてゐてよ。子供は無いし、世間と交際するぢやなし、二人きりでぢつとして歳を取つてゐちや、手頼りないに極つてゐるんですもの」

「市太君の生きてゐた時分にや、平和な家だつたがね。……全體子供といふ者は、そんなに價値のあるものだらうか。貴女はどう思ふ？」

「私そんなこと知らないわ。……だけど、可愛らしくつて怜悧な子なら、有る方がいゝんでせう、人がよくさう云つてるぢやないの」

「不思議なものだね。僕にやまだ分らない。女房や情婦の惚氣は遠慮するやうな慎み深い男でも、子供のことになると、手ばなしで惚けたりするが、僕には些とも諒解が出來ないね」

「でも、他人の子でも可愛らしくつて怜悧なら、貴下だつて憎か思へないでせう。死んだ市太さんを貴下はどう思つてました？」

「さうさ。別段憎くも可愛くもなかつたね。……僕が旨い口を利いて綾してやるもんだから、あんまり懐かれ過ぎて、少し煩いと思つたことはあつたが」

「ぢや、貴下は懐いて來る者を煩がりなさるの？」

「なに、僕は子供のことを云つたんです」

「だけど、天の使のやうに無邪氣な子供にさへ愛情を有たない人は、誰れに對したつて愛情が薄いんですつてね。……私、市太さんが死んだといふ音信があつた時には、一日泣いて暮らしましたよ」

「貴女ばかりぢやない。明君はじめ、彼家へ弔詞に來た人が皆なそんな風なことを云つてゐましたね」と、靜夫は自分もさう云つたことを思ひ出しながら、「しかし愛情が厚いか薄いかの研究なんかはしないで、戀しいものは戀しい嫌ひなものは嫌ひなで、お互ひの心まかせにしといたらどうだらう」

「鎌倉へ着いた晩貴下が私に云つてらしつたことゝ、今夜仰有ることゝは大分違ふんですわね」

「僕の云ふ事を、さう一々覺えてゐて比較されちや堪らないね」

靜夫は横になつて煙草を吸ひながら、鎌倉で自分が云つたといふ甘つたれた言葉を仙子が復習

するのを聞いてゐたが、さうしてる間にも、自分がこの女のために、英吉夫婦の信用を賭してまで、飯倉の家を出て來たことが後悔された。……今から自分の言語動作を絶えず注意して心に刻まうとしてゐるやうな女を側に置くのは、探偵と起臥を共にするやうな煩はしさが感ぜられた。

人が結婚生活の幾年かの間に經驗するやうないやな氣持を、早くも此家で經驗してゐるやうに自ら思つてゐた。

「鎌倉の宿屋で僕は心にもないことを云つた譯ぢやないが、貴女がそれを信じるか信じないかも貴女の勝手さ」

「信じてゐなければ、一刻もこんな所にかうしてゐられやしませんよ。だから、私に不安心な思ひをさせるやうなことはこれから云はないやうにして下さいな」

火鉢の火は盛んに熾つてゐたが、バサ〳〵した空つ風が寒さうに雨戸に音を立てゝゐた。

宮川が迎へに來るまでは、飯倉へ歸ることを承知しないで、靜夫が賴むやうに說いても、容易に聞入れなかつた仙子も、宮川に對しては筋の立たない我を通し得なかつた。

「叔父さんも叔母さんも快く貴女を待受けてゐらつしやるんだから、些とも心配なことはありませんよ。それに貴女方が家庭をお持ちなさるについちや、叔父さんから私に一切の事をおまかせになつてゐるんですから、一日も早く運びをつけやうと思つてゐるんです。お引受けした上は、貴女方のためばかりではない、私のためにも一日も早く責任を果さなければなりませんからな」と、宮川は快活な口調で賴もしげに云つた。

「どうしても歸らなければ惡いのなら、お伴して歸りますわ。だけど、晝間は何だから日が暮れてからにして頂きたいんです」と、仙子は條件をつけてやうやく得心した。

「さうと極つたら、一刻も早くした方がいゝんですがな」、宮川は云つたが、相手の機嫌を害ねるのを憚つて、强ひて勸めはしないで、改めて迎へに來ることにして時刻をも定めて歸つた。

宮川が出て行くと、仙子は、「監獄へ入る前にもう一日氣儘にしてゐたいと思つてあゝ云つたのよ。どうせ歸ると極つたら、晝間だつて夜だつて同じことなんだけれど」と云つて、夕方までの遊び方について、いろ〳〵と相談を持掛けた。靜夫は暫しの別れが永久の別れになりさうに思はれもしたので、その心構へをしながら、女のソハ〳〵した相談に相槌を打つてゐた。

芝居とか喰物とか散歩とか、仙子は差當つての娛樂を數へ上げて、靜夫の同意を得たが、いざとなると躊躇した。人中へ出て行くよりも、矢張りこの部屋の中で二人きりで、氣兼ねしないで惜しい一日を過した方がいゝやうに思はれだした。

「こんな汚い部屋へも二度と來ることはないと思ふと、何だか名殘り惜しいやうな氣がしてならないわ。一生の間にいく度も思出すことがあるだらうと思つてよ」と云つて、俄かにこの部屋に愛着を覺えたやうに左右を見廻した。靜夫も仙子の目の動く方へ自分の目を向けてゐたが、中棧の玻璃越しに日の差してゐる疊の上に、自分の煙草の火でつくられた燒跟のあるのが何よりも心に留つた。見てゐる中に大きく見えだした。……腹甸ひになつて煙草を吸ひながら仙子の寢物語りを聞いてゐる中に、知らず〳〵彼れがつくつたので、彼れはそれを今度の戀の記念のやうに思つて見入つて微笑を洩らした。

「明日から毎日一度は私に宛てゝ手紙を書いて下さいな。屹度よ、……そして、今夜から何處へ泊んなさるの？」と、仙子に訊かれて、靜夫ははじめて自分の宿の無いのに氣づいたやうに、

「また元の下宿へでも轉げ込むかな」と呟いた。

「それがいゝわ。それだと私にも貴下のゐらつしやる部屋の樣子がよく分つてるから、思ひ出すに都合がいゝのよ。……どうせ少しの間だから彼處で辛抱なさるといゝわ」

二人はつひに何處へも出ないで短い日を暮した。約束の時刻が近づくと、仙子は靜夫にいろんな事を誓はせたが、誓はせた後では長い沈默を續けてゐた。靜夫は元の古巣の下宿へ入つて、一

人で起臥をする自由を默想してゐたが、仙子が歸つて行く飯倉の家へ明が引續いて出入りすることを思ふと、平然としてはゐられなくなつた。今までどの女に別れる時にもこんな氣持のしたことはなかつたのに興味の薄らいでゐる仙子に別れる時に女々しい嫉妬なんかを感ずるのは愚ぢやないかと、自ら戒めながらも、明が目觸りになつてならなかつた。宮川が戯談半分で云つた言葉が新な力をもつて彼れの頭を刺戟した。明の息の根を止めるまでに打勝たつもりでゐたのに、その明は今となつて忌はしい戀敵となつて彼れの目に映りだした。

靜夫は自分と仙子との戀の際限なく續くのを望まないとゝもに、仙子に明の影の伴ふのを思ふのが堪へられなかつた。で、今日以後に仙子といふ女がこの世から消えてしまへば、それに越したことはないやうに思はれたりした。

十八

再び迎へに來た宮川が、仙子を連れて俥で飯倉へ出掛けるのを、玄關に立つてボンヤリ見送つてゐた靜夫は、やがて部屋へ戻つて火鉢の側に腰を据ゑるとゝもに大欠伸を洩らした。

「おれもかうしてる間にひとりでに花婿さんになれるんだが、……そして、普通から云つたら、

資産の豐な叔父を有つてゐるあの女と結婚して、おれの損になる氣遣ひはないんだが」と、暫く自問自答してゐたが、胸の躍るやうな新婚の樂みは待設けられなかつた。

「お一人でお淋しう御座いますね」と、膳を下げに來た中年増の女中に云はれると、

「僕が淋しさうに見えるのかい。……今夜は手足を伸して樂々と寢ようと思つてゐるんだ。按摩を呼んで貰ひたいもんだね」と云つて女中を笑はせた。

靜夫はいゝか惡いか、仙子と自分との關係に一段落をつけたつもりで、風呂へ入つて按摩を取らせて熟睡した。そして、翌日は規定の時刻に遲れないやうに出勤した。休暇中放縱な生活をしつゞけた後だけれど、役所の乾燥無味な仕事が彼れにはさして勤め苦しくはなかつた。

役所が退けてから、愛宕下の元の下宿へ寄つて、空室の有無を糺すと、幸ひ元の部屋が空いてゐたが、彼れは直ぐに移轉しようとはしないで、琴平町の宿屋へ歸つた。机の上に屆いてゐる宮川からの端書には、「仙子は無事に山村氏の家に收まつたやうだ。それについて君に話したいことがあるから、今夜にでも拙宅へ來て下さい」と書いてあつた。

結婚の進行について興味を起しかねて居る靜夫は、自ら進んで宮川を訊ねる氣にはなれなかつた。仙子に對して、日に一度の音信を出す約束はしてゐても、最早彼女に宛て以前のやうな甘つ

たるい手紙は書く氣にはなれなかつた。溫かい血潮の通つてゐる若い女の唇に觸れたことも、灰を舐めた後のやうな氣持で思ひ出されるのであつたが、それに拘らず、明と彼女との掛合ひについては不思議に冷然としてゐられなかつた。……それだけはどうでもよくはなかつた。

森川町の下宿へ電話を掛けて、明が朝出て行つたきり歸つて來ないといふ返事を聞くと、靜夫は飯倉の家で明が仙子に會つてゐる樣を想像に浮べないではゐられなかつた。そして、その飯倉の家へは當分自分の方からは出入が出來ない事情になつてゐるのが低悟しくてならなかつた。

「歸つて來たら僕の方へ電話を掛けるやうに云つて下さい」と賴んで置いて、その夜は明の知らせを徒らに待ちながら過ごした。

翌日出勤の仕度をしてゐるところへ、來客の知らせがあつたので、明かと思つてゐると、入つて來たのは意外にもおとよであつた。先日よりも青褪めて寒さに萎けたやうな顏してゐた。

「愛宕下へお移んなすつたのかと思つてゐたら、まだ此處にゐたのですか」と云つて、おとよは人一倍の好奇心をもつて、若い男女の隱家を見廻した。

靜夫は恐縮して迎へたが、仙子に變な疑ひを掛けられたことを思ひ出して、おとよの顏を見てゐると、擽つたくなつた。肝腎の點には觸れないやうにして、英吉や明のことを訊いてゐると、

「今日は先生に祕密で此方へ來たのですから、そのつもりでゐて下さいな。結婚前に私からどうしても貴下に伺つて置かなければならないことがあるんです」とおとよが生眞面目に云つたので、

「先日は私が失禮なことを申上げましたが、今日は謹愼して承はりませう」と、靜夫は目を伏せて、「しかし、大體は宮川さんからお聽きになつたらうと思ひますが」

「あの人の仰有ることなんか何にもなりやしません。たゞ結婚式を擧げさへすれば、何もかも濟むと思つてゐなさるんだから。……貴下御自身でもさう思つてゐらつしやるかも知れないけれど、この結婚が成立つたなら、容易ならん事が起つて來さうなんです。……私思つてもゾッとしますよ」

おとよは聲を潜めてさう云つたが、靜夫は驚きもしないで、耳を澄まして次の言葉を待つてゐた。

「さう云ふと、貴下は明が失望してどうかしたのかと思ひなさるでせうが、それはまだ輕い方なのです。明も二三日此來私の家へは寄りつかなくなつて、私としちや何だか氣になつてゐるんですけど、あれは根が呑氣な子供染みた男ですから、日が少し經つたらあの女のことなぞ綺麗に忘れてしまふでせうよ。私の心配してゐるのは明のことぢやありませんの。……貴下はお仙ちやんが東京へ出て來た譯を知りなさらないから、平氣で結婚をする氣になつてゐらつしやるけれど、あの女が一人で私の所へやつて來たのは、ある田舍の男の目を眩まして身を隱すためなのです。本當は先生が呼寄せたために面白づくで來たのぢやないんですの。こんな事を私の口から云ふのは何だけど、貴下のためにも當人のためにもと思つてお話しするんですから、そのつもりで聞いて下さいな。先生はあゝいふ世間に疎い人だから、好いた同士で一緒になりさへすればそれで事が收まるやうに思つてゐなさるんですけど、私は先日から一人で氣遣ひでならなかつたのです」

「それは困りましたね」と、靜夫は當惑したらしく眉を顰めたが、腹の中では、そんな下らないことで態々ケチをつけに來たおとよの心根を淺間しく思つてゐたのであつた。

「それに貴下は何處がよくつてお仙ちやんを好いてゐらつしやるのか知れないけれど、貴下のお嫁さんになりたい女はいくらでもあるんぢやありませんか。……貴下は先日中お仙ちやんと一緒に夜晝を送つて、末の約束をしてゐるのだから、今になつて約束を破る譯には行かないと思つてゐなさるか知れないけれど、そんなことは構やしませんよ。私がどうにでもして取計らひますから。貴下さへ破約の決心をなされば。……」

無法な押付けがましいおとよの言葉に、靜夫は呆れたが、笑ひ〳〵、

「だけどね、叔母さん。僕は身内の者に爪彈きされてゐる人間なんだから、お仙ちやんの身持に多少の疵があるくらゐなことは何とも思つてやしませんよ。……貴女は昔耶蘇教の空氣の中で育つた方だから、男と女の愛は神聖だの人間の貞操はどうだのと堅苦しいことを考へてゐらつしやるのでせうが、そんなことはどうでもいゝぢやありませんか。お仙ちやんが僕の女房になりたいと今思つてゐるのなら、以前の身持の穿鑿なんか止した方がいゝと、僕は思つてゐますよ」

「貴下は結婚をそんな風に考へてゐるんですか。……それでおきくさんをも弄ばうとしたんですね」おとよは昂奮して、思はず聲を高くして、「貴下がさういふ量見だと、私は尙更今度の結婚に反對しなければなりません。年末に私の家へ越して來なすつた時に、先生や私に誓ひなすつたことも、皆な嘘だつたのですね。私たちは貴下に騙されてゐたのです」

「それについちや自家辯護はいたしませんが、しかし、貴女御自身は結婚の妨害をなすつて、どれだけ利益があるんでせう」

「貴下のやうな人は利益々々と、何事も打算的に考へてらつしやるんでせうが、私は人間の道に背いたやうな結婚を平氣で見てはゐられないんですから」

「さうですか……」靜夫は人の道を武器にして向つて來るヒステリー女の句調を擽つたく思ひ

ながら、話を轉じて、荷物に附いてゐた手紙の中にあつた暗號のやうな文句について訊ねた。そして、「危い物」とは短刀のことだと事もなげに答へられると、

「それは不思議ですね。僕は短刀なんか持つてたことはありませんよ」と、驚いた顏をした。

「だつて、たしかに貴下の部屋にあつたのです」

「何の爲めに僕がそんな物を持つてる必要があるんです」

「貴女のお宅の者が紛れ込んだのぢやないとすると、餘程變ですね。それこそ先生の所謂奇蹟だ。お歸りになつてからよく調べて御覽なさい」

靜夫は出勤時刻になつたのを口實にして、おとよがもつと話をしたがるのを振切つて座を立つた。

「ぢや、貴下は私の云ふことは用ひなさらないんですね」と、おとよが氣色ばんで云ふのを、

「よく考へて見ませう」と、靜夫は輕く受流して、逃げるやうに部屋を出て行つた。が、何とも云ひやうのない厭な氣持が暫く彼れの頭に殘つてゐた。おとよのやうな女でさへ持つてゐる女の根性を彼れは憎んでゐた。

その日も役所では、穩かな氣持で一日の役目を勤めて、牛肉屋で晩餐を濟まして宿屋へ歸つた

が、不在中に宮川も訪ねて來てゐたし、おとよと仙子との手紙も屆いてゐたし、明から電話も掛つて來てゐた。靜夫は自分を中心にしていろ〳〵なごとの起つてゐるやうなのに、自ら誇りを感じながら、暫くどれにも手を觸れないで、ゆつくり風呂へ入つて來て、それから自分で茶を入れて飲んだり、煙草を吸つたりしながら、仙子の手紙の上書を見入つて、中味を見破つてゐる氣になつてゐたが、するとそこへ、青褪た顏をした明が案内も乞はずに入つて來た。靜夫は思はず机の上の手紙を肱で蔽うて、

「どうかしたのか」と、目を峙てゝ侵入者を見上げた。

「叔母が正午過ぎに家を出たつきり歸らないんだが、君の所へは來なかつたらうね」と、明はせか〳〵息を吐きながら云つた。

「正午過ぎにかい。知らないよ。……何か家を出る譯があつたのか」

「叔父と衝突したといふことだが僕は先つき電話で呼出されて、止むを得ず久し振りで飯倉の闘を跨いだのだから、眞正の事情はよく知らないんだ。兎に角、君もこれから飯倉へ行つて呉れたまへな。叔父は君を待つてるんだよ」

「僕が飯倉へ行つてもいゝのかね」

靜夫は出掛けるまでに、二通の手紙を讀みたかつたが、二つとも明の目を憚らなければならぬ者なので、そのまゝ袂へ入れて部屋を出た。二人とも心配らしい口を利きながら、外へ出ると、道を急ぎはしなかつた。

「ぢや、君はあの後飯倉へは行かなかつたのだね。仙子には會はないんだね」と、靜夫はこれだけは多少氣掛りだつたので念を推して、「さうすると、この二三日はどうして暮らしてゐたのだ。下宿にもゐないやうだつたが」

「それは云へないね」明は餘計なお世話だと云はぬばかりに答へて、「僕は君たちのことについては一言も聞きもせず聞かされたくもないんだから、そのつもりでゐて呉れたまへ」

「さうかい。……しかし、それはエライ覺悟ぢやないよ。君が怨みや憎みを感じてゐるのなら、無理にそれを壓へる必要はないぢやないか。今度叔母さんが先生と衝突して家を出たことだつて、お仙ちやんのことに關係があるに違ひないんだから、その點から云つても、君はお仙ちやんに對して知らん顏しちやゐられないだらう」

「それはさうだが。……」明は、靜夫が仙子の名を口にするたびに、胸をドキ〳〵させた。そして三人が是から一つ所で顏を並べることに思ひ及ぶと心苦しかつた。

電車に乘ると、席の都合で二人が別れ〳〵になつたのを幸ひに、靜夫はおとよの手紙を袂から出して讀んだ。

「あなたのためと思つて、お話したことを、あなたは素直に聞いて下さらなかつたのです。内所で申し上げたことを、あなたの口から先生や仙子に打明けられたら私一人が惡人になるのです。あなたに好意を有つて來た私をあなたは惡人にしようとするんですか。私は生きてゐられないやうな氣がします。……」

四十過ぎてゐるおとよが、こんな手紙を男へ宛て〻書いたのはこれがはじめだらうと思ひながら、靜夫はふと、胡散くさい目を此方へ向けてゐる明を見やつた。

「……何故お手紙を下さらないのです。私宛ての書狀は叔母さんか誰れかゞ沒收して私へは渡して呉れないのだらうかと疑つて、お安へ賄賂を使つて郵便が來たら直ぐに取りに行つて貰ふことにしてゐるのですが、いまだに一通も屆きません。何故お手紙を下さらないのでせう。私は心配でなりません。今日は何を食べたとか、誰れに會つたとか、何處を歩いたとかいふやうなことでもよろしいから、毎日一度は必ず何か書いて送つて下さい。私は成べく自分の部屋に閉籠つて人に會はないやうにして居ります。叔父さんや叔母さんの前に出てゐる間でも、石地藏のやうに

なつて居ります。叔父さんはい〻方で、私だちの不爲めになるやうなことは思つてゐなさいませんから、あなたも安心してゐらつしやい……」

仙子の手紙にはかう書いてあつた。靜夫が二つの手紙を讀み終つた時分、電車は飯倉に着いた。

「僕は何故だか、今夜は先生の家へ行きたくないやうな氣がするよ。これまでにも闕の高い思ひをしたことはあつたが、今夜ほど行きにくい思ひをしたことはなかつた。何だか氣味が惡いやうだよ」と、靜夫は薄暗い坂を下りながら云つた。

「僕だつて行きたかないさ」と、明は叔父の家へ近づくのを厭に感じてゐた。

「僕の所行を良心が咎めてゐるために行きにくいんだと思つちや違ふよ」と、靜夫は云ひ足したが、明は默つてゐた。

二人が門を入ると、英吉自身に迎へに出た。おとよはまだ歸つてゐなかつた。

「困つたことが出來ましたね。叔母さんはどうなすつたんでせう」と、靜夫は思ひなしか、四五日の間に急にまた歳を取つたやうな英吉の顏を見て、流石に憐れを催しながら訊ねた。

「君には何か心當りはないだらうか」

それを何よりも手頼りにしてゐた英吉は、おとよの家出前の言語擧動の一伍一什を隱さずに打

明けて意見を求めた。

「平生あれが懇意にして出入りする家は殆んどないのだから、捜しに行くにも當てがないんだ。不吉な事でも起らなければいゝが、どうも僕の家は破滅するやうな運に向いてゐるらしいから……」

「そんな事はありませんよ。僕と明君とでこれから叔母さんの捜索に出掛けませう。……その中歸つて入つしやるだらうとは思ひますが」

「とに角さうして呉れたまへ。そして、これを機會に君たち二人は仲直りして呉れたまへ。お互に氣まづい思ひをしてゐるかも知れないが、僕に免じて仲直りをして呉れるやうに僕が懇願する。……家内が歸つて來たら、この家をどうにか處分して、僕等夫婦は日向へなり何處へなり田舍の方へすつ込んで、神に仕へて殘生を送らうと思つてるから、その時は置土産として、君たち二人の爲めになることをしようと思つてゐるよ。……僕等夫婦は不幸な運を持つて生まれて來てゐるのだが、君たちには前途に幸運が輝いてゐるんだ」

英吉の述懐は明には何の慰藉にも刺戟にもならなかつた。靜夫は無用と知りながらも、火鉢の側で躊躇して居る場合ではないので、この家と多少でも關係のある家を一々英吉から聞いて、

その中の重な二三の家を訪ねることゝした。おとよの故郷の親戚へも電報を打つことにした。

「手分けして行くことにしようね」と、靜夫は明を促すと、明も不承々々に重い尻を持上げた。

「寒いのに御苦勞だね」

英吉は二人を送り出してから、奥の部屋にゐた仙子を招いて、

「お前は心配しないでもいゝよ。お前までも身體を悪くしちや困るから」と、強ひて笑ひを浮べて慰めた。が、仙子は叔母の家出を、意地悪い策略のやうに思つてゐたので、叔父が恐れてゐるやうな變事を豫想してはゐなかつた。

「おれもお前を此家の相續者にすることは出來なくなつたが、しかし、靜夫と家庭を持つについては、相當の助力はしてやるよ。お前も傍で彼此云はれようとも、よく〳〵緣があつて靜夫の妻になるのだから、夫を大切にして圓滿に暮らすやうにしなさい。」

英吉はおとよに對する不安な思ひを紛らすために、妻としての心得などを仙子に語つて、もどかしい時を過してゐたが、仙子はハキハキした返事はしないで、自分一人の物思ひに耽つてゐた。話が止切れると、靜かな冬の夜は微かな物音をも物凄く二人の耳に響かせた。何かに觸れた庭の木の葉の音や、廂を傳つてゐる猫の足音などを、二人とも無氣味な思ひを寄せて聞いてゐた。お

とよが亡兒の聲を聞くのを笑つてゐた英吉も、雨戸の側か次の室にかにそれらしい聲がしてゐるやうに感じてひそかに驚いたりした。

「何方かゞもう歸つて來さうなものだが」と、英吉は時計を見て太息を吐いた。

「萬一今夜中に叔母さんの行方が分らないやうだつたら、警察へ捜索願ひでもお出しなさるの？」と、仙子は先日自分が家出した後のことを連想しながら訊いた。

「捜索願ひ？。……おれはかういふ事は表沙汰にしたくないよ」

「だけど仕方がないぢやありませんか。捜しに行つた人は二人とも叔母さんを連れて來りやしないでせうから」

仙子の冷淡らしい言葉は英吉には不快に聞えた。で、その話には觸れないやうにしてゐたが、傍で氣休めにでも希望のある言葉を聞かせて呉れないでは、ぢつとして待つてゐるのが堪へられなくなつたので、「おれは些つと出て來るから」と云つて、人通りの杜絶えてゐる淋しい道へ出掛けた。さう遠方へは出掛ける氣になれないので、誰れかゞ歸つて來るかと、電車道の方へ行きつ戻りつしてゐた。星は氷のやうに光つて頰に觸れる風も痛いやうに冷たかつた。

英吉はたまに行過ぎる人影に目を留めながら、他に求めるところはなかつた。たゞおとよがそ

こへ姿を見せて呉れさへすればいゝので、さうしたら、專念一意彼女の憂鬱な心を慰めて、彼女とともに亡兒の靈魂を見詰めて浮世の事にかゝずらはないで、殘生を過さうと、キラ〳〵光つてゐる星の前で誓つてゐた。

けたゝましく馳せて來た電車が止まると、二人の青年が一緒に下りて來たので、英吉は側へ寄つて行つた。

「叔母さんはまだお歸りにならんのですか」と、靜夫の方から訊ねた。そして、「私ども別々に廻つたんですが、途中で待合せて一緒に歸ることにしたのです」と、どうでもいゝことまで云つた。

英吉は落膽したが、二人の青年が側にゐて呉れるのをせめてもの力として、連立つて家へ歸つた。長火鉢の側にゐた仙子は、三人が歸つて來るのを見ても、石地藏の如くぢつとしてゐた。

お通夜のやうな氣持で、おとよの幻影を見ながら、四人は離れ〴〵で坐つてゐた。去年の夏の市太の逮夜の有樣を明は連想してゐたが、あの時に靜夫に對して憤つたやうな力は有つてゐなかつた。誰れの顏をも見ず誰れに話しかけられても殆ど口を利かなかつた。靜夫一人は英吉を慰めるやうに絶えず話を仕向けながら、袂の手紙を思ひ出しては、灰を舐めるやうないやな氣持にな

つてゐた。

君だちは若いからこれから前途に幸福があると、英吉が今の肝心の事に心を疲らせて突如として云ふのが、いかにも空虛で取つて付けたやうであつた。

更け行く夜は次第に皆なの顔を疲らせた。

警察から不吉な知らせを傳へて來たのは、長い夜の明けかゝつた頃であつた。

大正十年九月十日印刷
大正十年九月十五日發行

KINSEIDO

深淵
定價金壹圓七拾錢

著作者　東京市神田區表神保町十番地　正宗白鳥
發行者　東京市牛込區早稲田鶴巻町三六二　福岡益雄
印刷者　東京市牛込區早稲田鶴巻町三六二　谷口熊之助
印刷所　早稲田印刷株式會社

發行所　東京市神田區表神保町十　金星堂
電話神田（三八五三番 四八三一番）振替口座東京三三二八番

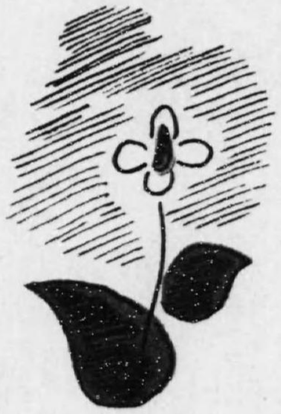
■金星堂出版圖書目錄

東京市神田區表神保町十番地　電話神田三八五三・四八三一　振替東京三三二八

著者	書名	判	頁	定價	送料	内容
田山花袋	代表的名作集 小春傘	四六判	440	2.50	.12	著者の出世作「蒲團」を始め「別るゝまで」「別れてから」等其傑作十三篇を集めたる代表的選集にして愛誦すべきもの也
田山花袋	長篇小說 春雨	四六判	210	1.30	.06	嬌艶花の如き美女が其數奇なる運命、愛欲の世界の苦惱は奔放絢爛なる作者獨得の筆に生けるが如く描かれたる力作也
田山花袋	長篇小說 殘る花	四六判	230	1.30	.06	春雨の姉妹篇とも謂ふべきもの、關東平野を舞臺として捨鉢な女の戀愛生活を描寫した此一篇は優に獨得の力作也
田山花袋	長篇小說 かの女	四六判	250	1.50	.06	飽く迄も現實を基調として別に一箇渾然たる藝術の世界を創出する氏が藝術家と一少女との愛欲の苦惱を描きしもの也
田山花袋	長篇小說 海の上	四六判	300	1.70	.06	現文壇の驚異は測るべからざる花袋氏の創作力にして今や氏は日本より歐洲を舞臺として戀の甘い歡樂を描く蓋し是れ近來の大作
太田三郎	武藏野の草と人	四六判	450	3.50	.12	著者が如何に自然に對して深い愛着を以て武藏野の自然や人に親しみ且つ培はれたかを物語れるもの也
太田三郎	新日本畫の描き方	四六判	200	2.00	.12	斯界の先覺たる著者が新日本畫の眞義を說き描寫の法を語れるもの初學者の敎導書にして十數枚の自作を挿入す
生田蝶介	歌集 寶玉	小形	250	2.00	.06	著者の第二歌集にして崇高なる自然と著者の聖心との融合を詠じ人生の宿命に基ける葛藤を歌ふ
生田蝶介	歌集 凝視	小形	250	2.00	.06	著者の新著第三歌集にして著者が最近二年間精進に精進をつゞけた胸の内から湧き出たる思想のふくらみは此一卷也
正富汪洋	戀愛小曲集	小形	250	1.20	.06	詩壇の巨匠汪洋氏の抒情詩集にして收むる處純情涙を流すべき小唄戀愛の歡樂境地を歌へる短唱小曲あり
竹友藻風	審美論集	四六判	350	2.50	.12	著者はチタア・ペイタアに私淑すること多年、よく其眞髓を得たるの人、今玆に現實を透視して審美を美しきリズムを以て表白せり

宇野浩二	加能作次郎	藤森成吉	白鳥省吾	川路柳虹	藤森秀夫
創作集	創作集	創作集	詩集	小曲集	小唄集
空しい春	**誘惑**	**その夜の追憶**	**憧憬の丘**	**蘆の笛**	**フリヂヤ**
四六判	四六判	四六判	小形	小形	小形
292	325	330	330	320	250
1.70	1.80	1.80	1.50	1.50	1.70
.06	.06	.06	.06	.06	.06
若き四鶴を想はせる「遊女」を始め笑謔のうちに沈痛の人間苦を示せるもの其他面白くして藝術的價値ある小説以上の小説五篇を收む	著者の名篇世の中への續篇「昼」を始め「餘燼」「廓を出た頃」以下十篇の一粒選りの近來稀に見るの佳品にして新人の讀むべき小説也	著者の特長を示せる長篇「故郷を去るまで」を始め「罪業」「奇妙な家」等以下九篇の眞摯の態度と秀拔の技倆を示せる傑出の作品を收む	詩壇一方の領袖たる著者が憂鬱の田園を歌ひ始めて見る大都市の幻像を歌ひ愛慾の惱みを歌ひし青春期の詩を收む	現詩壇に華かな才名を謳はれつゝある著者の小唄童謠の玉篇を集めし愛くるしき小曲集にして心のなかの聲、子供の歌、夢の唄を收む	著者が其愛篇より小唄、短詩、民謠、童謠の精粹を抜きたる優美なる小唄にして山田耕作氏の作曲を挿入せし頗る美本也

자4L 1



終